
凍りの滅竜魔導士

ゼオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凍りの滅竜魔導士

【Nコード】

N2187T

【作者名】

ゼオ

【あらすじ】

何度も題名変えてすいません

原作とは全く違う、オリジナルの物語です

主人公は高校生の凍弥

ある日夢を見ていたら、突然FAIRYTAILの世界へそこからリアルと夢を行ったりきたりする物語です

～日課～（前書き）

今日からFAIRY TAILの二次創作書いていきたいと思います。

駄文ですが、どうぞ読んでください。

感想など、評価など

していただけたらうれしいです。その後の参考にしたいと思います

く日課く

- ある高校の一室 -

二人の男子高校生がある話題について話している

オレは、凍弥^{こい}。(雪羅^{せいろ} 凍弥^{こい})。高校一年。もう高校に行きはじめて、半年がたつ。身長：170? / 髪型は銀髪で、あまり長くない。そして、隣に座ってる奴がオレと馬が合う、友達の『中田』。下の名前は、あえて言わない

「いや、言えよッ! !」

中田がツツコミをいれてきた

「お前モノローグを読むな! !」
「スマン」

そう言われると、中田は引っ込んだ

オレ達二人は、毎日朝学校行く時、休み時間そして放課後にこの文学部、通称：ヲタク部。の部室で『F A R Y T A I L』について話すのが日課だ

「どうだった? 最新刊??」

凍弥は、中田に質問した

「んゝ良かったよ。特に・・・リサーナとナツが再会するとこ」

「だよなー！オレもあそこの感動したーまぢ泣きそうになった。そう言えば、泣きそうになったと言えば、アニメでエルザが一人泣くところヤバかったなー！」

凍弥は目を閉じ頷く

「ヤベっ！思い出しただけで、涙出てきた」

目に涙を浮かべる凍弥

「そやな、あれはヤバかった。それよりもし付き合っなら誰がい??」

「おい。オレの話を受け流すな！！まあオレは…」

凍弥は、真剣に考えている

「ぐへっ！いつてー。凍弥！」

「何だ、どうした??」

「どうしたじゃねえ！そのツッコミどころにかしろ！強すぎるんだよ。オレの腹が持たん」

中田は腹を抑えて、イスにぐたぐたとしている

「すまん。中田、これはもう治らない。中学からこうだから。オレはどうすることも出来ない。中田頑張ってくれ！」

自分の身体みを守るためにやった、空手などの体術がこんなことになるとは、凍弥は、体術をやっていたこと後悔した

「さっきの質問の答えだが、オレはレビィカリサーナがいいな」

凍弥は、そういうと自分が『FAIRY TAIL』の世界で、付き合っているところを想像…訂正…いや！妄想した！そして、凍弥はニヤけた

「うわぁゝ気持ち悪ッ！…また妄想してるよゝ凍弥…お前どう考えたって絶対無理なんだから」

「分かってるよ、だからいいんだよ！」

凍弥は独自の感覚を持っている

「で、お前はどんなんだ？誰と付き合いたいんだよ？」

凍弥は逆に、中田に質問した

「……………」

田中は、何も答えない。凍弥はおかしいと思い中田を見た。そうすると、中田は気を失っていた。

「おーい中田ー！だ、ダメだ…たくつ、だらしねえゝなあゝ」

そう言つと凍弥は中田を放置して、家に帰る準備を始めた。凍弥が準備していると、中田が意識を取り戻した

「此処は何処？私は誰？」

「いいって、そういう『お約束』」

凍弥はあきれて言う

それを聞いた中田は黙々と帰る準備をはじめた。

- 2分後 -

凍弥と中田の二人は校門に立っていた

「さて、帰るかー」

凍弥は歩きだした

「待ってくれゝ凍弥ゝ」

それを見て中田は追って行く

「はたく来いよゝ中田」

二人は、『FAIRY TAIL』について熱く語りながら家に
向かって歩きだした・・・

～日課～（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第1話 竜との遭遇

―夕方 6時頃―

ガチャンツ!!

家のドアが開いた。凍弥は家に帰り着いた

「ただいまーって誰もいないか・・・今日も一日頑張ったーオレ!!」

自画自賛

そして、自分の部屋に行った

凍弥の家は平家で。両親は基本、家にいない。

「さて『FAIRY TAIL』読むか」

学校から帰ってきたら『FAIRY TAIL』を全巻読むのが凍弥の日課

―1時間後―

「ふう・・・やっと読み終わったーこの時間が1番幸せだなーやっぱり・・・リサーナとナツが再会するとは何度読んでもヤバいなー!!」

凍弥は全巻読み終わるとベッドに横になった。部屋の棚には『FAIRY TAIL』のマンガやグッズなどが並んでいて、机の上

には絵を描く道具が散乱している

凍弥の趣味は絵を描くこと、『FAIRY TAIL』のことを
いろいろ想像すること…元い妄想することです

凍弥は横になったまま目を閉じ、そしてそのまま眠りについた

— 夢の中 —

「・・・此処は!?!」

(いつも見る夢と違ってるな)

凍弥の前には、白銀の氷の世界が広がっていた

【お前は誰だ!!】

何処からか声が聞こえた

凍弥は、周りを見た。しかし、周りには、誰もいない

ヒュ————ッ!!

突如、周りに吹雪が吹き荒れた

「寒ッ!」

(ん?・・・寒い・・・)

凍弥は、夢の中なのに感覚があることに気付いた。

（感覚がある???もしかしてここは、現実世界?）

凍弥は、一人疑問に思った・・・
そして、上から何かが下りてきた

「ん!？」

凍弥は、下りてきた何かを目を細くして見た。そして、自分の目を疑った。凍弥は一步後退りした。
自分の前には、竜が立っていた

「そんな、嘘じゃないよな!!?」
「いたたたッ!」

凍弥は自身の頬を引っ張る。それと同時に頬に痛みが生じる

（痛い!?!じゃあこれは、本物!?!??）

竜は、凍弥の元に歩いてくる。それに対して凍弥は、一歩ずつ後ずさる

でも、凍弥は躓いてこけてしまった。竜は、近づいてくる
そして、竜は凍弥の元に着くと止まった

「どうか、命だけは!・・・」

凍弥は、そういうと竜の方を見た

（スゲーー！でけー！それに、鱗一枚一枚が透明でキレーだ！カッケーー！！）

凍弥は、竜を見て目を輝かせている

【お前は誰だ??】

竜は、凍弥に問う

（竜が喋った！？）

「オレは、凍弥。雪羅 凍弥」

【トウヤ！？何故此処にきた？まさか私の力を欲してきたのでは！??】

ダンッッッ！！

竜は、凍弥に向かって脚を使って攻撃してきた

凍弥は、それをギリギリのところかわす

「ちょ、ちょ、ちょ。待つて下さい…オレ！力なんて知りません！・・逆に知りたいくらいです」

【何！？ホントか？】

竜は、攻撃を止めて凍弥に訊いた

「はい…ホントです！力のことなんて知りません。信じてください」

（この竜、何か力を与えたりできるのか？）

凍弥は、疑問に思いながらも竜の方を見た

【そうか。それはすまなかった。私の勘違いで危うく、お前に怪我をさせてしまったのだ。すまない。私は、『シヴァルト』凍の竜だ】

（いや、普通の人間だったら死んでただろ…）

「凍の竜！？」

凍弥は目を丸くした

「なんだ？そんなに驚くことか？まあ私の力があれば、お前を滅竜魔導士にすることだってできるがな。ふんッ！」

シヴァルトは勝ち誇ったように言う

「ふん…」

凍弥は、シヴァルトや周りの世界を見渡す

【ここが此処か！？ここは、私の住家だ】

「ここから一番近い国はどこです？？」

【ここからか？？ん、確かフィオーレ王国だったかな？？】

（フィオーレ王国！？）

「フィオーレ！？」

凍弥は、その単語を聞いた瞬間^{とき}鳥肌が立った。そして、また妄想することに特化した脳みそでどんどん、妄想を膨らませていく

（これがもし、現実なら…ナツやエルザ、『FAIRY TAIL』のギルドのみんなにあつて握手したりできるかも）

【トウヤ・・・お前、魔法使えるのか？】

シヴァルトは、凍弥に質問した

凍弥の頭の中の妄想が、途中で切れてしまった

「使えないよ」

凍弥は、異常な程汗をかいた

【そうか・・・ならお前に滅竜魔法を教えよう】

凍弥はしりもちをついた

「滅竜魔法！？そんな大丈夫なんですか??」

【何がだ？教えるのは簡単だ！肝心なのは凍弥！お前の心だ！】
「オレの心??」

凍弥は、自分の胸に手を当てた。それを見てシヴァルトは

【そうだ。お前のやる気次第で、早く魔法を身につけることができるかは決まる！】

シヴァルトは凍弥の胸を左脚で指し言った

「オレやります！！滅竜魔導士になります！！」
ドラゴンスレイヤー

凍弥は、自分の胸に力を込めて言った

【そうか！分かった！ならば、まず魔力をつけよう！】

「魔力！？」

凍弥は目を？にしてシヴァルトに聞く

【魔力は己の気持ちだ！！経験を積むことで、魔力は増える
なるほど」

凍弥は、物事を理解するのが早く、さっそく動き始めた

- 1分後 -

「何すればいいの？？」

凍弥はシヴァルトに聞いた

シヴァルトは歩いていたが、それを聞いて脚をひっかけて、こけた

【知らんのかい！！知らんなら、はじめから聞かんかい！】

シヴァルトは、凍弥に言った

ドラゴンスレイヤー
そして、凍弥の滅竜魔導士になるための特訓が始まった

第1話 竜との遭遇（後書き）

感想などあったら

よろしく願います。

あと、評価もして頂けると、うれしいです。

第2話 特訓の成果

- 訓練が始まって1週間 -

1週間、ずっと『魔力』の訓練をしてきた。凍弥は、自分が夢の中にいることを忘れていた。

日が傾き周りが暗くなってきた

ボタンッ!!

凍弥は地面に倒れこんだ

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

【今日は、これぐらいにしとくか】

シヴァルトは、そう言うと口から吹雪を出した

【トウヤ・・・右手を出してみる】

「こうか??」

そう言うと、シヴァルトは凍弥の右手に向かって吹雪を吹きかけた。そうすると凍弥の右腕には、透明の竜が巻き付いたリングが付いていた

「これは??」

【これはだな、お前がこっちの世界に来るためのリングだ!お前は、この世界の人間では、ないようだからな】

「この世界の人間じゃないって、分かってたの??」

凍弥は、シヴァルトが自分のことをこの世界の人間じゃないと分かっていることに驚いた

【そうだ！竜を甘く見るなよ！こう見えて鼻が利くんだぞ】

シヴァルトは、自信に満ちた表情で言う

（そうだよな・・・よく考えてみたらナツも鼻が良かったなーでも、ガジルはどうなんだろー??）

凍弥は、ガジルの鼻について疑問に思った

「そうなんだー。シヴァルトドラゴンスレイヤー！それって滅竜魔導士も鼻が利くようになるの??」

【んーそうだなー。基本的に利くようになるんじゃないか。私も詳しい事はよく知らん】

シヴァルトは、自分の知っていることを凍弥に教えた

「へーありがとう・・・シヴァルト」

【さて・・・そろそろ飯にするか】

「そうだね」

そう言うのと、二人は、シヴァルトが昼の間に採っておいだ食材を料理し始めた。凍弥は枝や石を使って火を起こし、シヴァルトは、前脚を器用に使って、食材を切った。凍弥も始めは、火を起こすのに30分程かかっていたが、今では、1分もかからずに点けれるよ

うになった

その差29分！！一週間でこの差は、凄いッ！凄すぎる！！凍弥は、飲み込みが早過ぎる。だから今は、こつやって料理もできる始めのほうは、料理もともに出来なかった。凍弥の飲み込みの早さは、半端じゃない。凍弥だからできることだ

- 20分後 -

料理が出来上がった

「さつご飯出来たよー食べよーシヴァルト」

【ああ・・・いただきます】

シヴァルトは、何か淋しそうな顔をしてご飯を食べ始めた

「いただきますーす」

凍弥は、シヴァルトが食べ始めるのを見て食べ始めた。二人は、30分でご飯を食べ終わった。その間、シヴァルトは何か考えていたきつと今日だな・・・

凍弥はというと・・・ご飯の片付けをして、寝る準備をしていた

「シヴァルトー明日も訓練だし、もう寝よう」

【そうだな・・・寝るか・・・】

そう言うとシヴァルトは、体を丸めて寝る準備をした。凍弥はその丸まった中心に行き、頭と背中をシヴァルトのお腹に当てて、目

を閉じた。

「おやすみ……」

【ちよつといいか……凍弥】
「なに？」

【もしの話をするが……もしもだぞ！……もし私が消えても探そうとしないでくれ……危険だから。お前には、滅竜魔導士としての力はある】

「え！？なにそれ？消えるってなに？いなくなるの？」

【いや……もしもの話だ……】

シヴァルトは凍弥から目をそむける

「オレはまだ、魔力を維持する方法しか教えてもらってないよ！！
滅竜魔法なんて使えるわけがない！！」

凍弥は、強く言う

【それが、使えるんだよ……お前には！『滅竜魔法』とは、竜と一緒にいることで身につく魔法なんだ……】
「そんな、じゃあオレは滅竜魔導士ってことなの？……」

凍弥は、シヴァルトの顔を見て尋ねた

【そういうことになる……】

シヴァルトは、そう言つと目を閉じた

「そうかぁー」

（オレ、滅竜魔導士なのかー！実感わかねー詳しいことは明日訊こ
う。明日も朝早いからもう寝よ・・・）

凍弥は、もう寝ることにした・・・

そして、これがシヴァルトと凍弥の最後の会話となった…

第2話 特訓の成果（後書き）

滅竜魔法の設定は、オリジナルです。
次も早めにupしたいと思います。

第3話 リングと希望（前書き）

すいません。

テストが近いのでUPがおそくなりました。

実際のところ、次もいつUPするか分かりません・・・すいません

最後まで読んだら

感想や評価していただけたらうれしいです。

第3話 リングと希望

『凍弥！・・・凍弥起ろ！』

凍弥は頭に声が聞こえた後、目を覚ました。目を開けた先には見覚えのある“天井”があつた

「此処は？・・・」

凍弥は寝ぼけているようだ
そのため、自分が自室のベッドに寝ていることに気付くまで、少し時間がかかった

「凍弥！！起きなさい！もう中田君来てるわよ！遅刻するわよ！！」
奥から何故か懐かしい声が聞こえた

「この声は・・・母さん！？」

凍弥は、やっと自分が家にいることに気付いた。ベッドから飛び下りた

「此処は・・・家？？」

凍弥は何が何だか分からなくなつて、こんがらがっている

「凍弥！ホントに遅刻しちゃまうよ！！」

母さんが今にもキレそうな声で言いながら、部屋にやってきた

ガタンッ！！

音と共に部屋の扉が開いた

「凍弥！！つてあれ？起きてたの？起きてたなら返事しなさいよ。
ほら、早く中田君きてるわよ」

そういうと、母親は居間に戻って行った。凍弥はまだ頭の整理が
つかずにベッドに座っていた

ふと、シヴァルトから貰ったリングのことを思い出した。そして
…右手を見た

カランッ

右手にはシヴァルトから貰ったリングがついていた

（やっぱり、あれはホントにあったんだ！…夢じゃないんだ！オレ
は、シヴァルトと一緒にいたんだ！！）

そう思うと、嬉しさが込み上げてきて、叫んだ

おッ——！！

オレはドラゴンを見たんだ！！

あれは夢じゃなかったんだ——！！

凍弥は叫ぶと、制服に着替え始めた

- 10分後 -

中田は玄関の前で待たされていた

ドンッ!!

「今日も 良い天気だな——」

凍弥は右手を、でこの前にやって太陽を見て言った。右手のリングが太陽の光に当たって輝く

「おッ!どうした…凍弥らしくないな…」

中田には凍弥が昨日の凍弥とは別人の様に見えた

「何言ってる?オレは、変わんないよ!。ほら行くぞ!遅刻しそ
うだ」

そう言っていると凍弥は歩き始めた

中田はその後を追うように早歩きした

「どうした凍弥?何かあったか!?機嫌いいみたいだけど…」
「そうか…いつもと変わらんとするけどな——」

(今、何か言ってもツツ「ミ、<通称:『魔の掌』>をくらわなくて
すむかも…ニヒヒ)

中田は凍弥に何を言おうか考えている
いつとき
一時考えていると…ふと頭に浮かんだ!

(よし!これでいこう!)

中田は、覚悟を決めて一人の名前を口にした

「最近・・・陽那ちゃんとはどう??」

びくびくして凍弥に言う

「陽那? あー普通だな、何の進展もなし…」

そついうと凍弥は右腕を上に乗げた

(ヤバい!! やっぱり怒ったか! やっちまった――)

中田は『魔の掌』をくらう覚悟をした。凍弥は、挙げた手を

「止めてくれッ――」

中田は頭を手でおさえ腰を下げ、道にうずくまる

「ってあれ? 何もない? ……」

(いつもならここで「名前を出すな! バカがッ!!」って言って『魔の掌』をくらうとこなのに・・・)

中田は凍弥の方をみた。すると凍弥は右手を頭にやっていた

「あゝやっぱあれだなー。んゝ自分から積極的に行かないとダメだな。なつ中田! ってあれ?」

田中には何を言っているか分からなかったが、何か一人納得している様子だ。凍弥は中田の方を見ている

「何してんだあいつ。来ないなら置いて行くまで！」

凍弥は、早歩きして中田からどんどん離れて行く。それをみた凍弥は、必死になって走った

しかし、中田は文科系の部活に所属しているため追いついたのは、学校の校門前だった

「着いた——」

凍弥は笑顔で言う

陽那についてはまたの機会に話そう

一方中田はというと——

「ハア、ハア・・・ハア。やっと追いついた・・・・・・・・」

必死の思いで、凍弥に追いついた

でも、顔色がすごく悪く、呼吸も荒い。今にでも、倒れそうな状態で学校に入っていた

「結局・・・FAIRY・・・TAILのこと・・・話せなかった・・・」

中田は必死で凍弥の後を追う

しかし、中田はもう体力が無くなって、歩くスピードはとても遅くなっていた。やっとの思いで、下駄箱に着いた。中田にとって、今日のグラウンド一直線は、持久走よりもきつかっただろう。

下駄箱は・・・

校門を入ったらグラウンドがあつて、その奥にある。そのため、グラウンドを一直線にいく必要がある

中田が下駄箱に着いた時、凍弥は教室前の廊下を歩いていた。

「誰あれ！？あんな人いたっけ？」

「あの顔なんか見たことあるなー」

「あの銀髪・・・誰だ？」

周りにいる生徒が、ざわついている。それもそのはず、クラスでインキヤラ扱いされて昨日まで人を寄せつけない雰囲気を出していた凍弥が、今は、光輝く雰囲気を出して歩いているからだ

（なんでみんなオレ見てんだ？？まあどうでもいいけど・・・今日から積極的に・・・）

凍弥は教室の前に立った。そして・・・ドアを開けた。

ガラガラガラ――

教室の中にいた同級生は、みんなドアの方を見た。

「オハヨーみんな！」

凍弥は元気にあいさつしながら教室に入った

「あれ誰？あんなのクラスに居たっけ？」

「あの銀髪・・・まさか雪羅くん！？」

凍弥はクラスでも影が薄い...だからみんな苗字しか知らない

クラスのみんなは、一斉に同じ言葉を口にした

『ええ――！！？』

また、ざわついてきた

「あれホントに雪羅くん？？」

「昨日とは別人だぞ！おい・・・」

周りは凍弥の話題で話が盛り上がっていた。それを凍弥は、聞いてないかのように無視しながら、自分の席に向かう

実際聞いているかどうかは、本人にしか分からない。もしかしたら、全く聞いてないかもしれない。

教室の席は横が6人。縦が6人の計36人

凍弥の席は、窓側で日当たりがいい。中々のポジションで前から3番目

その頃、中田はというと・・・

教室前まで来たものの・・・あと一息というところで、倒れてしまった。廊下にいた生徒たちは、中田の所に円になりみんな心配そうに見ている

凍弥は中田を放置して心配することすらなかった

（凍弥なんであんなに体力あるんだ？オレと同じぐらいのはずなのに…何故だ！）

中田は、そう疑問に思い意識を失った…話はこのまま中田放置で

進んでいくことにしよう

キ——ンコ——ンカ——ンコ——ン
キ——ンコ——ンカ——ンコ——ン

朝礼が始まるチャイムと共に、凍弥にとって最悪な時間の針が^{スタ}始動した

キ——ンコ——ンカ——ンコ——ン
キ——ンコ——ンカ——ンコ——ン

「はあ~~~~あ。やっと終わった——！」

凍弥は授業が全て終わって開放感に浸っていた

「このあとどうする？凍弥」

凍弥の肩に手をおき、話してきたのは、朝廊下で倒れた中田だった

「このあとは……？お前いつ教室に戻ったんだ？」

「いつって？5限目には、教室にいたさ」

「いつ意識回復した？」

凍弥は中田に訊いた

「えっと——2限目の終わり頃だったけな——そして、そこから昼休みまで……」

バチンッ——！！

音と共に中田の胸に何かが触れた。そして…激痛が胸に走った。そして、中田はあまりの痛さに声も出さずに床に崩れ落ちた

魔の掌！！！！

い、いただきました……

「ガハッ！！…ゴホッ！！…ゴホッ！！」

中田は胸を押さえて、咳こんでいる

「なんで…今日、機嫌よかつたんじゃなかったのか？…ゴホッ！」
「それは、朝までの話だ。今は、超までとは言わんが、不機嫌だ！」

「な…何があつた？…」

中田は、下を向いて凍弥に訊いた。

「実は…」

凍弥はいろんなことがあつたことを一から説明した

「なるほど…それで、今に到るわけか…」

中田は、やっと咳が止まり普通に喋れるようになってきた。

「それは…ドンマイだ。凍弥」

「今日はもう帰るよ………」

凍弥は、一人俯いて教室を後にした…

凍弥は、家への帰路を一人、下を向いて歩いていると、ふと右手に目が止まった。そこにはシヴァルトから貰ったリングが夕陽を浴び、金色に染まっていた。

そして凍弥は何かを思い出したかのように家へ走り出した。この時、実際凍弥はある言葉を思い出していた

このリングは、お前がこつちの世界に来るための物だ…

シヴァルトに会える、また『FAIRY TAIL』の世界に行ける。凍弥は思いのまま家へ走った！！！！

第3話 リンゲと希望（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

第4話 再び（前書き）

UPするのが遅くなってすみません

次もUPするのに時間かかると思います
すみません・・・

第4話 再び

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

凍弥は、秋なのに大量の汗をかきながら家に走る

ガチャッ！！

家の扉が開いた。凍弥は、急いで靴を脱ぎ家上がった。母親は、仕事に行っていて。父親は単身で外国に行っている。結果家には、誰もいない。家の中はカーテンも窓も開いてなく、暗い。そして秋にも関わらず暑かった。凍弥は暗い中自分の部屋に向かって走る。部屋の前につくと呼吸を整えるために、深呼吸をした。その間にも、凍弥のあごや髪から汗が床に落ちる

ガチャッ！！

そして、ドアノブを掴み、ゆっくりドアを開けた

・・・・・・スーッ！！・・・・・・ハア――

そこには、いつもと変わらない景色があった。凍弥は、ゆっくり部屋に入った。入ったら、凍弥は扉を閉めてその場にボーと立つて周りを眺めている。その間にも汗は床に落ちる。凍弥は、まずタオルで汗を拭いた。そして、習慣の『FAIRY TAIL』を全巻読むことをわすれ、ベッドに横になった。

きつと、眠ればシヴァルトに逢えると思ったのだろっ。そのまま、凍弥は目を閉じた。そして、夢の中へ・・・

- 1時間後 -

凍弥は目を開けた

「あれ？何でこの前は行けて、今日は行けないんだ？」

凍弥は、疑問に思った・・・

「次こそ！」

そして、次は深い眠りについた。起きたのは、次の日の朝だった。
・
・

「何で行けないんだ！？」

凍弥は、ベッドに横になったまま、掌で顔を隠す。そして、掌と顔の間から一滴の涙が零れおちた

「シヴァルト！逢いたいよ——」

この時の凍弥は、親と離れ離れになった小学生みたいな感じで、凄く悲しんでいた。そしてまた一日が始まった・・・凍弥は、学校には行くものの休み時間は一人と・・・誰とも口をきかなくなった。家に帰ると、すぐに部屋に行ってベッドに入った。またシヴァルトに逢うため・・・しかし、結果は同じだった。シヴァルトに逢うこと、どころかあの世界に行くことすら出来なかった・・・

凍弥はこんな生活を1ヶ月続けた・・・1ヶ月後にはもうシヴァル

トのこと、ましてやリングのことすら忘れていた・・・そして、今ではやっと前のような生活に戻りつつあった・・・

「ただいまゝって、誰もいないか・・・」

弥は、そう言つと靴を脱ぎゆっくり部屋に向かう。家の中は、いつも通り暗く昼間とは思えない

ガチャッ！

扉を開ける凍弥。そのまま部屋に入ると制服のまま着替えずに、ベッドに座つて『FAIRY TAIL』を読み始めた。もちろん読み始めたのは、一巻からだ

- 2時間後 -

パタンッ！

凍弥は、漫画を閉じるとそのままそれをベッドに置いた。そして、凍弥はベッドに横になった

「はぁ・・・最初から最後まで読むのにこんなに時間かかったっけ・・・」

凍弥の言う通り、読むスピードは格段に落ちていた・・・前は1時間で読めていたものの、今ではその2倍の2時間で読み終えていた。凍弥は、天井に吊してある電球に向かって右手を挙げた・・・

カランッ！

そこには、今まで忘れていたシヴァルトから貰ったリングがあった。リングをよく見ると少し光輝いているようにみえた

（あれ？今光ったような・・・）

凍弥は首を傾げる。

しかし、次見たときにはもう光ったりしていなかった・・・

（気のせいか・・・）

そう思うと、右腕を下ろした

凍弥は、横になったまま手足の先を軽く伸ばし、欠伸をした

「はあ~~~~あ。何か眠いな——」

凍弥はゆっくりと夢の世界へ・・・・・・・・

周りから人々の声が聞こえる
目を開けた凍弥。体は地面に横たわっていた

「ん？此処はー？何処だ！？・・・」

凍弥は上体を起こし目の前にある景色をみて愕然とした

「じ！・・・じ、此処は・・・まさか！！！！」

そこには、漫画やアニメの世界でしか見たことのない『FAIR

Y TAIL』の“マグノリア”の世界が広がっていた。凍弥が驚くのも分かる

「オレまた来れたのか？・・・」

凍弥は、まだ自分がいるこの瞬間^{とき}を信じられない。後ろからやけに騒がしい声が聞こえた。そして、凍弥は立ち上がり、振り返った・

「ま、まさか！！！？」

そこには、憧れのギルド『FAIRY TAIL』があつた・・・

凍弥は、開いた口が塞がらなくなり、さらに驚きその場に立ち尽くしている・・・

- 数分後 -

凍弥は、やっと自分が置かれている状況を把握した
そして

ナツやルーシー、ギルドのみんなに逢うために、ギルドに向かって歩き出した・・・

第4話 再び（後書き）

評価や感想などお願いします。

第5話 ギルド

凍弥は、ギルドの扉の前に立っていた

「やったッ！ついに・・・ついに、ナツやハッピーに逢える！！」

声が弾んで、胸を踊らせていた。そして、ドアに手をかけた

ドカツ！！！！

凍弥がちょうど手をかけた瞬間勢いよく、扉が開いた。そして、凍弥は後ろに倒れて頭をおさえていた

「痛たたたた——！！」

凍弥は自分の頭を撫でながら、言う

「ん？誰だオマエ。知らねエー顔だな？」

声の主のほうを見た凍弥。そこには、桜色の髪。鱗みtainなマフラーをつけた少年が立っている

「ま・・・ま・・・まさか！！！！ナツ・・・さん？ですか？」

凍弥は、憧れのナツに逢えて嬉し過ぎて、体は震え、声は上擦っていた

「な！！！！な・・・な・・・な・・・何で！？コイツ、オレの名前知ってんだ？ハッピー」

ぱた ぱた

後から羽の生えた猫が飛んできた

「さあねえ、ナツ、オイラにきかれても分かんないよ、ネコです
から」

「ハッピーだあ——！！やっぱり！かわいいなあ——」

凍弥は目を輝かせながら、ハッピーを見た

「うわ、何こいつ？すごい目してるよ——ナツ」

ハッピーは凍弥を見て率直に感想を述べた

「そうだな——スゴいなあ……それはそうと、ハッピー早くク
エスト行くぞ！！急がないと電……うぷ……キモ……チ……ワ……
ル……」

ナツは『電車』と言いたかったのだろう、しかし、乗り物に弱い
ナツは乗り物の名前を言おうとしただけで、酔いがくる。重度の乗
り物酔いだ

「ほら！ナツ、行くよ」

ハッピーはナツが背中にからった荷物を掴み、飛んだ

ヒュ——！！

二人、いや一人と一匹は、凍弥の前から飛び去ってしまった

「あゝあ。せっかく逢えたのにクエストに行っちゃったよ……
！！そうだ！！中にはまだメンバーいるよね！」

凍弥は立つて、服についたチリなどを払った。そして、ギルドの
中に向かって歩き出した……

カタ……カタ……

おい！……なんだよ！……さあ行こうか！……e t c

ギルドに近づくにつれて、賑やかな声が聞こえてきた。それは、
どんどん大きくなる！！

そして、凍弥は『FAIRY TAIL』のギルドの扉をくぐった

「眩しッ！！」

凍弥は、目を手で隠した

「………」

凍弥は感動のあまり声が出なかった。クエストボード……バー・
・机……漫画やアニメで出てくるギルド通りの内装が広がって
いた

「ん？始め『FAIRY TAIL』のギルドをみたときから思っ
ただけ……この内装……建物は確か……
幽鬼の支配者と戦った後のだよな……どこまで進んでるんだろう……」

顎に手をやり、目を閉じ凍弥は何か考え始めた

「あの〜」

何か聞き覚えのある声が、凍弥の耳に入ってきた

（このキレイなで澄んだ声はまさか！！）

凍弥は、声のした方を向いた。そこにな、銀髪の長い髪をなびかせ、前髪をゴムで結び、ドレスを着た女性が凍弥の前に立っていた

「あなたは、ミラジーンさん？」

凍弥は、目の前に立っていた女性を見て頬を赤らめた

「あら、あなた。見かけない顔ね？」

「はい！俺『FAIRY TAIL』に入りたくて来ました！！！」

凍弥は、強く意志を示した

「そうなのね・・・そんなところに立ってないで、中に入りましよう。あと、私のことはミラでいいわ」

そう言つとミラジーン（以後：ミラ）は凍弥を中に入るように勧めた

「は・・・はい！」

凍弥は緊張していた。そして、ギルドの中に足を踏み入れた。

「うわ——！スゲー——！！これが『FAIRY TAIL』か——」

目の前に広がる風景に感動した凍弥。そして、まず最初にカウンターにいる総長の所に向かった

カタツ・カタツ・カタツ・

「んんん？？」

マスター
総長は誰かが自分のもとに歩いてくるのに気づいた

「マスター。こちらギルドに入りたいと言う……ごめんなさい……名前聞いてなかったわね……」

ミラは、凍弥の方を見て苦笑いする

「雪羅 凍弥です！！」

凍弥は、自己紹介をした

「ごめんね……」

「いえ、いえ、こちらこそ……」

凍弥はミラを見て、笑いながら言った

「トウヤ？と言ったかのおおぬしこの『FAIRY TAIL』《ギルド》がどんなギルドか知ってておるのか？」

マスターは、凍弥を真剣な顔で見て返事を待っていた

「はい！・・・知ってます！覚悟は出来ています！！」

そう返事をする凍弥も真剣な顔でマスターを見た

・・・・・・・・・・・・・・・・

沈黙が二人、いやミラを含め三人を包んだ。

「そうか・・・分かった！これから、頑張って働くんじゃぞ！ワシは、『FAIRY TAIL

』のマスターのマカロフだ！」

「ようこそ！『FAIRY TAIL』へ。これから頑張てね・・・ところで、どこに紋章^{マーク}入れる？」

ミラは、凍弥に訊いた

「ん？どこがいいかな？——」

・・・・・・・・

凍弥は、悩んだ

（究極の選択だな——！一回きりだからミスは出来ない）

「よしッ！決めた！！」

悩んだすえ、やっと決心がついた考え始めてから、5分が経っていた

「ミラさん!!」

ちょっと、ミラの顔が引き攣っていた

（何でミラさん顔引き攣ってんだ？オレなんかしたっけ？まあいいや）

「あのミラさん！紋章^{マーク}は左肩にお願いします！」
「分かったわ」

ポンッ！

漫画で見たスタンプが凍弥の左肩に押された

「はいっ！これであなは正式に『FAIRY TAIL』のメンバーよ！」

ミラはさつきとは全く違った笑顔で言った

「ヤッター!!! ついに憧れのギルドに入れた——!!!」

凍弥は感情を抑えきれず、飛んで喜んだ

そして

『FAIRY TAIL』の正規メンバーとしての生活がスタートした……

第6話 波乱な出会い

凍弥は、ギルド内にある舞台の上にいた。その前には、ギルドのメンバーが大勢いた。中には、憧れのグレイやルーシーがいた

（うわーグレイだー！やっぱカッコイイなあ！にしても・・・ギルドのみんなの視線が集中してまともに見れない・・・）

「みんなー今日は大事な報告がある！ここにいる少年は、今日からFAIRY TAILに入ることになった・・・」

「ギルドのみんなに自己紹介するんじゃ」

マカロフは、凍弥の耳もとでそう言うと一緒に後ろに下がった。

「せ、せ、せ、雪羅・・・凍弥です！い、いちお・・・凍りの滅竜魔導士です・・・よろしくお願いします！！」

・・・

そこにいた、凍弥以外のみんなを沈黙が包んだ

「え！？」

そこにいた、みんなは声を揃えて言う。マスターも初めて聞いたことで、声がでらず顎が床に向かって急降下した。そして、開いた口が閉じなくなっていた。顎が元通りになったのは、2分後だった

「凍りの滅竜魔導士だって！？」

ドラゴンスレイヤー

「これで・・・滅竜魔導士も4人目か」
ドラゴンスレイヤー
「4人目？」

凍弥は“4人”という言葉に反応した。そして、一つの疑問が解消された

「スゲー凍りか——ナツと正反対だな！ハハハ」

ギルドのみんなは思ったことを口々にしていた

「今日は宴じゃ——！！！」

「「「おおおっ！」「」「」

「トウヤの歓迎会じゃ——！！！」

マスターの一言でギルドのテンションはMAXまで上がった

「騒げや騒げっ——！！！」

「ミラちゃーんビール——！」

「はいはい——」

わ——わ——がやがや
わ——わ——がやがや

（やつぱり、FAIRY TAILは賑やかで楽しいギルドだな
最高！）

凍弥は、周りを見て一人笑っていた

「いやゝ盛り上がったなあゝ歓迎会！」

「そうだなあゝ」

ギルドのメンバーがいろいろ話ながらギルドを後にして行く。宴も終わり、みんな帰っていく。凍弥は、一人テーブルに向かって座っていた

「スゴイ楽しかったなあゝ特に後半が・・・」

目を閉じた。さっきまで、目の前に広がっていた風景が頭の中によみがえる・・・

「お前ゝ滅竜魔導士なんだろうゝスゲー——！」

「何っ！やっぱり凍り食べんの??」

「あっ・・・はい・・・たぶん・・・」

「そうなのかゝ！さすがだな」

「トウヤくんだったけ?・・・」

スタイルのいい金髪の少女が、トウヤのテーブルの向かいに座り、声をかけてきた

「あ・・・トウヤでいいです・・・」

凍弥は頬を赤らめ、下を向いた

（わゝルーシィさんだ——かわいい——！！）

「分かったわ！でートウヤ」

（わゝ！！トウヤだって下の名前呼ばれた！今人生で一番幸せです！）

「トウヤ・・・あなた・・・ 그레이と能力かぶってるわよね」

そう言つと、ルーシィは隣に座っていた 그레이を見た

「ん？何だよ・・・ルーシィオレの顔に何かついてるか？」

「いやゝただ、 그레이はトウヤの事どう思ってるのかなあゝと思つて・・・フフ」

「オレは別にどうとも思つてないぜ・・・まあ、似た能力同士よしくな・・・」

「じゃあ、トウヤはどう思つてるの？ 그레이の事・・・」

「オレは・・・嬉しいです！ 그레이さんと同じような能力で！」

「 그레이『さん』?!・・・」

그레이が反応した

「『さん』はやめてくれないか、 그레이でいい。『さん』をつけられると、こつ何と言うか・・・体に何か・・・あゝだめだ口で表現できねエゝまあとにかく今後は、 그레이でいい」

そう言つと 그레이は、テーブルに向き直り料理を食べはじめた
その隣には青を基調とした服を着た女性が座っていた

（あーあれ、 ジュビアじゃん・・・相変わらずなんだ）

「分かりました・・・ところでルーシィさん！」

「あたしもルーシィでいいわよ」

ルーシィはトウヤに笑顔で言った

ドクンッ！・・・ドクンッ！・・・ドクンッ！

「ル・・・ルーシィ・・・」

（ヒー！緊張した）

「はい、はい・・・なに？困ったことがあったら何でも訊いてね！」

ルーシィは機嫌いいみたいで、今なら何でも応えてくれそうだ

「ナツさんやエルザさんは、どこに行っただんですか？」

「ナツとエルザ！？ん」と、ナツはクエストに行つて・・・エルザは何か買いに行くつて言つてたかな・・・」

「そゝなんですか・・・」

（今日は、二人には逢えないみたいだな・・・はっ！ナツさんには、ギルドの入口で逢ったんだっただ・・・）

凍弥は、少し残念がった

「まあ、明日にはナツたちも帰ってくるよ・・・」

ドンッッ！！！！！

大きな音が扉のほうから聞こえた。みんなが一斉に扉の方を見た。その音と共に、“あれ”が回転しながら凍弥のほうに飛んできた

「ヤバイよ!!!これ!!!!絶対死ぬよ!!!!!!」

凍弥は、死を覚悟した

(せっかく、FAIRY TAILに入れたのに・・・もう死ぬのか?まだやり残したこと、沢山あるのに・・・)

凍弥は心の中で叫んだ。もちろん、誰にも聞こえてない

(こうなったら!!)

「凍竜の・・・」

凍弥が何かしようとした瞬間^{とき}、目の前に背が高く、学ランを着た男が何処からか現れた。背中には、大きく『漢』の字が書いてあった。その男は、飛んでくる扉の真正面に立っていた

「漢^{おん}ならこんなもん、逆に投げ返せ!!!!!!」

(この背中の字は?エルフマン?)

“あれ”は凄い勢いで縦回転しながら飛んでくる

ヒュルッ!ヒュルッ!!ヒュルッ!!!

「オオオオオオッ!!!」

ばしッ!!

「おお!!」

男は、扉を白刃取りの要領で、両手で掴んだ

「どうわ——!!」

しかし、回転が早く手で掴みきれず、結局男は・・・

スッ………ドスッ!!!!

扉を投げ返すことなく凍弥の横を通り過ぎて壁に激突。気を失った

「エルフマン……」

「何だ!? どうかのギルドの攻撃か?」

「みんな、気をつけろ!!!!」

「おい! 誰か扉の所にいるぞ!!!!」

扉が吹っ飛んだあとの入口には、砂埃が舞っていた。あまり、はつきりとは見えないが、そこには誰か立っていた

カタッ! ……カタッ! ……

そして、歩いて中に入ってきた

「みんな、来るぞ!!」

「誰が来るんだ? 入っていきなり騒動かよ! ……さすが、FAIRY TAILと言っべきなのか・・・」

凍弥は、怯えて下を向いていた。誰も周りにいないのに一人、小声で喋った。そして、凍弥も入口付近を見た

「ん？あれ？あれは・・・ナツさんじゃないか？？」

凍弥は、自分の目を疑った。そこには、今日見たナツがいた。でも、ハッピーはいなかった。

「お！ナツじゃねーか。早かったな」

「どうだった？今回のクエストは？」

ギルドのみんなは、正体がナツだと分かりみんな近づいていった。

「・・・・・・・・・・」

ナツは、みんなの言葉を無視し、下を向いて黙っていた。

（あれ？一緒にいたハッピーがいない。どうしたんだろう？）

凍弥は、そう言ったあとナツの周りを見た。それでも、ハッピーはどこにもいない・・・ギルドのみんなはナツに話しかけている。そんなのが、3分程続いた。凍弥は一人、料理を食べていた。そして、凍弥は炎を感じた、自分が一番弱い物を。すぐに凍弥は、根源の方をみた

「なつつ！？」

凍弥は見た瞬間、体が凍りついたようになった。そこには、ギルドの仲間が炎柱と共に宙を舞っている光景が広がっていた

「何事だ？？」

近くにいたグレイがそう言うと、周りいた数人の仲間も炎柱の方を見た

「うわ——！！！」

高く上がった仲間たちは、そのまま垂直に落ち始めていた

「ヤバっ！！！！」

グレイは、そう言うと何かの構えをした。パチッ！！手と手が当たった

「アイスメイク“道”」ロード

そう言うと、グレイは両手を床につけた。手が床に触れた瞬間、その場所から氷の道が、垂直落下している仲間の所まで真っ直ぐ延びていった。それはまるで滑り台の様な形をしていて、仲間が怪我をしないように考慮してあった

「スゲー！！綺麗だ！！さすが氷の造形魔導士」

おかげで、仲間は無事おることができた

「なんで？あいつはあんなになつてんだ？」

「さあゝわらんねエゝただ話しかけたら、いきなり・・・あんなふう・・・」

仲間とグレイが話していた

「仕方ねエーヤロウだな・・ッたくー!!」

グレイは、そう言うとなツに向かって走り出した。その後を、ほかの仲間もついていく

「おい！ナツ何やってんだ！！早く火い消せよ！」

「なんだ！？グレイ！！オレは今いらいらしてんだよー！！」

ナツは、そういうとグレイの方に炎を向けた。グレイは、とっさに両手を前に突き出した。一瞬でグレイの前には、氷でできた盾ができていた

「いらいだと？それをギルド発散するな！！別でやれよ！」

「うっせエよ！グレイ！！寝てる！火竜の咆哮！！！！」

「くそやろうが！アイスメイク“大砲”ランチャー」

ド——ンッ！！！！

炎と氷の弾丸がぶつかり水蒸気がそこらじゅうに広がった

「くそ！何も見えなねエ！」

「あれ？炎が消えた！？」

凍弥は、弱点のことだからすぐに分かった

カチャッ！・・・かチャッ！・・・かチャッ！

何か聞き覚えのある音がした。どんどん音が近づいてきた。そし

て・・・音が止んだ

水蒸気の幕が消えた。そして、音の主の正体が明らかになった・
・そこには、鎧を身につけた赤い髪？の女性とハッピーがいた。左手には、ナツ。右手には、グレイの襟をつかんでいた。

二人はのびていた・・・

「これは何事だ！！！！マスターはどこにいる！！！」
「げっ？エルザ！！！」

ギルドのみんなは、一歩あらずさった・マスターはと言うと・
・カウンターの上で座ったまま寝ていた。だから、ナツに何も言わなかったのか・・・なるほど納得

ドスッ！！

ナツとグレイを離してエルザは、カウンターに向かって歩いていった

「マスター！！！！！」

エルザは、近づきマスターに向かって怖い顔をした。マスターをそれを悟ったのか目を覚ました。

「何じゃ？エルザ怖い顔して？」

「『何じゃ？』じゃないです！マスター！！マスターが寝ている間に、もう少しでギルドが崩壊するところでしたよ！！！」

「そうか！それは、すまんかったのお」

マスターは、まだ酔っていて全く気にしてないようだった

「はあゝ仕方ない。みんな！！宴はこれでお開きだ！」
「仕方ないな！さあ、みんな帰ろう！」

一人が言つとみんなは家に帰り始めた・・

凍弥は目を開けた

「凄かったなあゝグレイとナツの魔法！感動した——！」

そこに、足音が近づいてきた。何人かいるようだ！

「おい！お前！滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}なんだろう、話したいことがある。ここじやなんだから家で話そうぜ！」

そこに居たのは、ナツだった！

「オレがナツの家に？いいんですか？」
「いいぜ！！さあ、行くぞ！！！」

凍弥は、ナツの後に着いて行つた。

（やったゝナツの家にに行けるのかゝクゝ最高！！）

- 数分後 -

凍弥は、見覚えのある部屋にいた

「なんで。あたし部屋なのよ!!」

「いいじゃんか〜!大勢の方が楽しいぜ!」

凍弥はルーシイの部屋にいた

（まあ。そうだろうと思った・・・やっぱり、ナツやルーシイはおもしろいな!これから楽しくなりそうだ）

その後も、ルーシイ、エルザ、ナツ、 그레이の口喧嘩は、夜のマ
グノリアに響きわたった・・・

「オイラの存在忘れられてるんだけど・・・」

「ゴメン!ハッピーいらいらしてて忘れてた・・・」

「酷いよナツ〜」

「今度、ウマイ魚とってやるから・・・な?」

「分かったよ。約束だよナツ!」

「オウ!!」

そして、凍弥にとって感動することばかりの一日が終わった・・・

第6話 波乱な出会い（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

誤字などあったら教えていただけたらありがたいです

率直に思ったことなど書いていただけたら次の参考になります。

最後に評価などお願いします

第7話 初めてのクエスト？

宴会があつた次の日の朝

「はあゝあ・・・ねっむッ！」

少年は、一人カウンターの前のイスに座って欠伸をした。他にもカウンターのイスには、何人が座って朝ご飯を食べたり、何か飲んだりしていた

「どうしたの？寝不足？」

カウンターの向に居る女性^{むかい}が少年の顔を見て訊いてきた

「はい・・・ミラさん・・・昨日の夜・・・ルーシィやナツたちに質問攻めにあつて、二時間位しか寝てないんですよ・・・」

「そうなんだゝそれは大変だったわね」

なぜかミラは、笑顔だった

それを凍弥は、右の頬をテーブルにつけた状態で、横目で見ていた

（なんで、ミラさん笑ってんだ？オレきついめにあつたのに・・・
・・・まさか！！ミラさんはドSだったりして・・・あの笑顔の裏には何が！？・・・）

ミラと凍弥は、目が合った。ミラはニコツと微笑んでいた。凍弥も、すぐさま笑顔を作った

（なんか・・・危なかった？・・・よな？・・・）

作り笑いをしたあと、扉の方から誰かがカウンターに向かって歩いてきた。背丈やがたいからして、男だった。凍弥は、自分には関係ないだろうと思ってミラと話していた。

「おい！お前！」

近づいてきたのはナツだった

「ねえミラさん・・・ガジルとウェンディーは何処にいるんですか？」

「え〜とねえ・・・」

凍弥は、自分が呼ばれているとは思わず、ミラさんとの話を続ける

ドスッ！！

凍弥の肩に何か重たい物がのしかかった

「ん??？」

凍弥は、自分の肩を見た。そこには・・・凍弥の肩をがつちりと掴んだ手があった。そのまま、その手の先を見ようとした。しかし、凍弥は相手の顔を見ようとする必要なかった。なぜなら、相手の顔が自分の目の前にあったからだ

「うわ——！！！！??？」

凍弥はミラの方に背中を向けてカウンターに背中を預けた

「オイ！！お前オレの話聞こえてんのか？」

ナツは、凍弥に向かって顔を傾け、問う

「あ・・・えッ・・・」

凍弥は、焦っていた。ナツの話を全く聞いてなかった

（ヤバイ！何とかごまかさないと・・・）

「あー！確か・・・昨日の事ですよ・・・確かプルーについてですよ・・・」

凍弥はとつさにあってもない出来事を話しはじめた。

「ん？そんなこと話したっけか？・・・・・・ん・・・」

ナツは、昨日の夜起こった事を一生懸命思い出そうとした・・・

「あゝダメだ！！思い出せねえ！！」

「ナツ――！！」

「ん！？」

ナツは声のした方を見た

「そんな話してないよー！」

そこには、青いネコが飛んでいた

「おう！ハッピー！！」

ナツはすぐに笑顔になった

「ナツ！トウヤ嘘ついてるよ！」

「そうなのか？」

スッ

ナツは凍弥の方を向いた。凍弥は、それと同時に顔を下に向けていた。

「おい。トシヤ・今の話ホントか？」

「『トシヤ』じゃなくて『トウヤ』です！！・・・話は全部作り話です・・・」

すぐさま凍弥は名前の間違いを訂正した

「す、すまない・・・それで、トウマ。お前・・・」

「だから！トウヤです！！！！」

凍弥は、どんどん声を大きくして、覚ってもらうようにした

「分かった・・・お前の昨日言ってたはなしだけど・・・」

（結局『お前』呼ばわり・・・か。なんか悲しい）

凍弥は、ちょっと残念そうな顔をした

「どうしたトウヤ？何か悲しい事でもあったのか？」

「いや・・・何でもないですよ」

（つてあれ？オレ今ナツに何て言われた？？）

「そうか・・・ならよかった！ところでよお昨日お前が言ってた話なんだけど・・・ホントか??」

「ああ・・・もちろん・・・何日前かは分からないけど・・・一週間だけ竜と一緒に暮らしてたよ！」

ナツはそれを聞いてすぐに、凍弥の襟を掴んだ。そして、襟を掴んだまま扉の方に歩き出した・・・

「ちょッ！ツッ！ナツ！何処行く気だよ？オレまだ朝メシ食ってないのに〜」

ナツは足を止めた。そして突然掴んでいた襟を離れた

ドンッ！

凍弥の頭が床に当たった

「痛エー！」

ナツは、扉の方から凍弥の方に向き直した

「朝メシ!!!？そんなの食ってるうちにも、竜はどっか行っちゃうかもしれないエだろ!!!それに会いたいだろ？その『シヴァルト』って言う竜に!!!」

自分も竜に会いたいのか？ナツの声には高ぶる気持ち少し感じられた

「まあ・・・会いたい・・・」

「じゃあ行くぞ！その竜がいる場所に！！」

ナツは、凍弥に手を差しのべた。しかし、凍弥はその手を掴もうとはしなかった

「行ってくて言っただって・・・話すことないし・・・ナツ一人で・・・」

ドンツ！！

「ふざけるな！！！！！！」

ナツは大声で怒号をあげた
そして、周囲に居たギルドのメンバーはナツと凍弥の方をみた

「オマエそれ以上言ったら、ぶん殴るぞ！！・・・今は何を話した
らいいか分からないかもしれない・・・でもな・・・会ったら自然に
言いたいことも出てくると思うぞ・・・だから・・・」

ナツは、凍弥の顔に目線を合わせた・・・と言ってもナツと凍弥
はあまり身長は変わらなかった・・・凍弥からはナツの目に一滴の
涙があるように見えた

（ナツがこんなこと言うなんて・・・知らなかった・・・）

凍弥はFAIRY TAILのヲタクとして知らなかったことが
あってビックリした

「……………そうだね…………オレ…………行くよ!…………ナツ
!」

凍弥はナツの顔を見て笑顔で言った。

「そうか……………」

ナツはそれを聞くと…………下を向いた

「ナツ!? 聞ってるの?」

「……………」

ナツは、変わらず下を向いて黙ったままだ

「ほら…………行こう! ナツ!」

凍弥はナツの顔の前に手を差しのべた

「……………」

「ほら!」

「……………おう……………」

ナツは、凍弥の手を掴もうとした
そして…………ガシッ!!

「さあ……………」

「行くぞオ—————!

「！」

ナツは凍弥の手を掴むと勢いよく走りだした！

「オラ！オラ！オラ！」

「！退いた退いた！！！」

ナツは猛スピードで、マグノリアの町を駆け抜ける

「ギヤア」

「誰か助けて！！！」

「」

凍弥は目が回っていた

そのまま、シヴァルトがいると思われる『ハコベ山』に向かった

「これだからナツは……オイラも行くぞ」

そう言つと、ハッピーもナツたちが行った方向に飛んでいった

「で？なんであたしが一緒について行つてるの……？」

ルーシイは凍てつく吹雪の中、凍えながら誰かに言っていた

「別にいいじゃねエか！仲間の頼みなんだから！！なんだ〜ルーシイ、もしかしてお前……仲間の助けなのに、それを拒むって言うのか……？最悪な奴だな」

「違うわよ！！そんなわけじゃないわよ！！いきなりだったからちよ

つとね・・・それはそうと！あたしが人間として最悪な奴みたいな言い方やめてよ！！あたしは、そんなに悪い人間じゃないわよ！！」

「えゝそうか！？オレは別になぁゝなぁエルザ？」

「ああそうだな・・・いいじゃないか・・・多い方が頼もしいじゃないか」

「全然今の話と関係ないんですけどー！！」

ルーシイのツツコミが吹雪の中炸裂した

「はつくしゅ！！！！ヤバイあたし風邪ひく！！開け時計座の扉ホロロギウム！！！！」

「出たー！！時計のヤツだー！！お決まりだね！ルーシイ」

ナツの隣を飛んでいたハッピーがすぐさま反応した

「そうよ悪い！！てかハッピーは寒くないの??」と申ししております。

ホロロギウムはルーシイが言ったことをそっくりそのまま代弁した

「オイラは・・・あれ？何で寒くないんだろう??ネコだからかな・・・フン！」

ハッピーは何故か誇らしくしていた

「オメエが、いつもナツの近くに居るから寒く感じねェんじゃねェのか？」

一緒に居た 그레이 が始めて喋った

「あんたが、寒くないのは分かったから・・・服着なさい！！！！」
と申しております。

「またもルーシィのツツコミ炸裂！しかも次は、申しております。
付き！」

「楽しいな」

一番後ろを歩いていた凍弥は一人笑った

「そうだ！！トウヤお前は寒くないのか??」

エルザ唐突に思ったことを聞いた

「オレは・・・凍竜の滅竜魔導士ですから・・・全くです」

「そうだったのか・・・知らなかった！」

（いや。エルザ・・・昨日しっかり言ったんですけど・・・ルーシィの部屋で）

凍弥は口にとすると危険と覺り、心で思ったことを口にするのを必死で堪えた

「その格好だったら・・・エルザは寒くないよね？」

「もちろんだ！十枚程着てるからな！！！」

エルザは、服を重ね着していて力士みたいになっていた

「ふふッ」

「何がおかしい!？」

「いえ・・・何も・・・良いと思いますよ・・・それ」

実際凍弥は必死で笑いを我慢した

「オイ！ちゃんと着いて来いよ！」

ナツは一番後ろで話しながら歩いていた凍弥とエルザに言った

（ホントにいるかな？シヴァルト・・・会いたいな・・・）

凍弥は、シヴァルトのことを考えていた・・・

そして

一行はハコベ山を休むこと無く登っていった・・・

「あたしは休みたい・・・！！！！」と申ししております

By ルーシイの一言

第7話 初めてのクエスト? (後書き)

読んでくださってありがとうございます
次も一週間後ぐらいにUPする予定なので楽しみにしてください

第8話 初めての感覚

ハコベ山 中腹

中腹は吹雪も弱まり、雪に変わっていた。ナツたち一行は、30センチ程雪の積もった道なき道をとにかく頂上^{うへ}を目指して、ひたすら歩いていた

ナツ、グレイ、ルーシイ、エルザ、ハッピーは、優々と山を登っていく。あ！ハッピーは飛んでます・・・

しかし、凍弥はナツたちと少し離れた所を歩いていた

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・なんで・・・あんなに歩けるんだ？・・・」

凍弥の、呼吸は荒く、ナツたちには話されないように歩くのが精一杯だった。それもそのはず、ここまで来るのに多くのモンスターを倒してきた。ナツたちは、魔法を使ってモンスターを倒していた。凍弥もみんなをマネして魔法を使った。凍弥にとって魔法を使ったのは、これが初めてだった。たった一回『凍竜の咆哮』をしただけで、魔力が半分以上無くなり、それ以後の闘いは、逃げるか物陰に隠れて、ナツたちが倒してくれるの待つことしかする術がなかった

そして

今に至る

「お————い！大丈夫か————？少し休むか————」

ナツが離れた所から凍弥に呼びかけてきた。凍弥のことを心配してくれているのか、みんな立ち止って凍弥の方を見ていた。凍弥は

嬉しかった

（心配されてる？・・・高校では心配されるどころか・・・むしろ邪魔者扱いされていたオレが心配されてる？こんなこと初めてだ！いいなあこの感じ・・・）

凍弥は初めての感覚に浸っていた・・・

「だ・・・大丈夫です！・・・先に行ってください！・・・」

（今は、急がないと！）

と思いみんなが先に行ってもらうように言った。そして、凍弥は雪に足をとられながらも、足取りを止めることなく頂^{うえ}を目指して、歩き続けた

歩いていると目の前に、得体の知れない白い物体が見えてきた

「何だあれ？」

その白い物体の前まで歩いていき、足を止めた。凍弥は疑問に思いい、得体の知れない物体に手を伸ばした

「ん？？何だこりゃ？触つても感触がない・・・これは一体？」

でも、凍弥は自分の手が少し濡れていることに気づいた。しかし、そんな事気にすることはなかった

「ナツたちもこれを通ったのかな？・・・きつと通ったよな・・・よし・・・先に進もう！」

自問自答し、凍弥は、先の見えない世界に足を踏み入れた。とにかく進んだ。ひたすら上へ上へとナツがいると思われる方へ・・・歩いていると白い物体から自然に抜け出すことができた

「ふうゝなんとか抜け出せた・・・」

抜けてちよつと歩いた所にルーシイが座っていた

「ん？やつときたわね・・・さあ行きましよう！」

「何やってるんですか？まさか！？疲れたんですか？」

凍弥はルーシイの前までくると足を止め、唐突に質問した

「ち・・・違うわよ！・・・あんたを待っていたのよ！！」

（これであたしの高感度UP！）

凍弥はルーシイを疑って、“じー”と横目で見た

「な・・・何よ！！・・・もう！・・・そうよ！・・・休んでたのよ！悪い؟؟みんなここで休んで行つたのよ」

「そうなんですかゝそれで、なんで・・・ナツたちと一緒に行かなかったんですか？」

「ナツたちのペースについて行けるか心配だったのよ」

「え？そうだったんですか？」

（心配してくれたんだーやさしいなあゝルーシイ）

「って言うのは嘘でゝ本当はもう少し休みたかったのよ・・・」

ルーシイは凍弥の方を見て“二カッ”と笑って言った

「だろーと思った。ルーシイが心配するなんて考えられない」

凍弥思ったような展開になって、楽しそうだ

「な・・なに――――！！あたしは、そんなに酷い人間じゃない―――い！！」

ルーシイは自分の人としての悪さ否定した

「ハハハ・・それは、そうと先を急ぎましょう！」

凍弥は、ルーシイを差し置いて歩き出した

「ちょ・・あたしの話は無視？待ってよ」

ルーシイは、“自分の足”で歩き出した・・・そこから、ルーシイによる「FAIRY TAIL」についての説明が始まった。約七合目すぎぐらいまでその話は続いた

始めは、楽しく聞いていた。でも、^{ルーシイ}どんどん自分の話になっていた。最終的には、ルーシイの自慢話になっていた

（あゝルーシイって、ナツたちがいなかったら、こんな話するの（意外！）

歩いていると八合目と書いてある看板が右前方に見えた

（ここから勝負だ！！）

凍弥は、誰かと競ってるわけでもないのに、気を引き締めた。そう、登山は八合目からが勝負？なのだ！！・・・凍弥とルーシイの二人は、看板の横をすぎた。少し歩いていると、前方に人影が見えた

「誰がいる！？ナツたちかな？それとも・・・凶暴なモンスターだつたり・・・」

「変なこと言わないでよ！ナツたちに決まってるでしょ！」

ルーシイは少し怖がった様子で、凍弥の背に隠れた

「あのおゝルーシイ？？」

「はい！？」

「オレ・・・まだ入ったばかりの魔導士なんだけど・・・」

「！！！」

そう言ったら、ルーシイはすかさず凍弥の前を歩き始めた。歩いていると、人影のすぐそばまで歩いてきていた。凍弥とルーシイは止まって、目を凝らした

じ

ある程度歩いてみたら・・・誰かは自おのずと分かった

「ん？？グレイ？」

「どこ！どこ！」

そして、凍弥が言葉を発すると後ろから突然、ルーシイが凍弥の前に現れた

2分前

ルーシイは、いつの間にか凍弥の後方にいた。凍弥は知っていたが、あえてノータッチでいた

「ホントだ！おーい！グレ——イ！」

ルーシイはグレイとわかると、手を振った

「お！やつと来たか、みんな待ってるぜ！」

「「みんな！？」」

ルーシイと凍弥は声を揃えて言った。よく見ると・・・グレイの先にハッピー、ナツ、エルザがいた

「みんな～！待っててくれたんだあ～」

ルーシイは、幸せそうな顔をして言った

「違うよ！ルーシイ！トウヤを待ってたんだよ」

羽を休めるために座っていたハッピーが言った。その瞬間、幸せそうな顔が一変、恐ろしい顔になった

「なんですって～！このネコちゃん！！二度と口がきけないようにしてあげようか？」

ルーシイは、恐ろしい顔をして、ハッピーに近づいていく

「ナツ～！ルーシイがオイラをただのネコにしようとしてるよー」

「何イ！——それはダメだ！——せめて喋れるようにしといて下さい！羽は要らないんで・・・お願いします」

ナツは、神頼みするように、ごんま跪いて両手を組んでルーシイに言う

「ナツー！羽が無くなったら誰がナツを運ぶのさー！」

「んー……誰だろうなあ……ルーシイかな」

「絶対！運ばんわー！」

ルーシイのツツコミ炸裂！

「オイラ以外いないでしょ！ねツ……ナツ！」

「それも、そうだな……！！……ルーシイ！どうか飛べるようにはしておいて下さい……口は利けなくてもいいんで……お願いします」

ナツは、ルーシイの足にしがみ付いた

「ちょ……ナツ！……気持ち悪いから離れてよ！」

ルーシイは、足にしがみ付いたナツを振り払おうとした

「はあーオイラ……もう……ナツとやっていけないよ……」

「そんなこと言うなよーハッピー」

「だって、今みたいなこと言うんだもん……」

その先も漫才コントは続いた……ルーシイ、ナツ、ハッピーが漫才コントをやっている間。グレイ、エルザ、凍弥たちはと言うと……

「お前……確か……『凍りの滅竜魔導士』だってんだよね？オレの“氷”食ってみるか？」

「いいんですか！？」

凍弥は、目を輝かせながらグレイに近づいた

「あ・・・ああ・・・別に問題はないが・・・その・・・ちょっと離れてくれるか？」

「す・・・すみません」

すぐに凍弥は、一歩後ろに下がった。グレイは下がったのを確認したら、手の平を見えるように前に出した

一瞬

グレイの手の平には「FAIRY TAIL」の紋章マークを象かたどった氷の塊があつた

「うわぁー！キレー！食べるのがもったいない・・・」

「何度見てもキレイだな・・・グレイの魔法は！」

「そんなことねエよ・・・こんなのいつでも造れっから！・・・さあ・・・食べてくれ！」

グレイは、凍弥の前に“氷”を差し出した

「では、失礼・・・していただきまーす」

凍弥は、グレイの手から“氷”をもらうと、戸惑いながらも口に運んだ・・・

ガリッ！ガリッ！

ガリッ！！ガリッ！！

「どうだ？オレの“氷”の味は？」

気になるのか、グレイは前のめりになりながら聞いてきた

「んゝ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんだ！！？」

「“氷”なのにあまり冷たくないです・・・」

「冷たくない！？」

グレイ、エルザは口を揃えて言った

「冷たくないとはどういう意味だ？」

グレイが聞くのではなく、エルザが質問してきた

「きっと、心が温かいからだと思います・・・」

「なるほど！よかったじゃないかグレイ！！」

「ああ！『まずい』とか言われたら、堪ったもんじゃなかったからなあゝ」

それまで、緊張していたのかグレイはほっとした表情になっていた。

（初めて、“氷”食べてみたけど、意外とうまかったなあゝそれに・・・）

「グレイのおかげで、少し魔力が回復したよ・・・」

「そうか・・・それは、よかった」

・・・・・・・・・・

グレイの言葉を最後に一時の沈黙が二人。いや三人を包んだ・

「初めは、オレと能力が被っていて、どんな奴かと思っていたが・
・実は良い奴だな、オマエ」

「そうですか!?!?・・・ありがとうございます!!」

「オレたちって、何気に相性いいのかもな!」

「そうかもしれないね・・・」

「ハハハハハハハ」

二人はお互いに顔を合わせて笑った・・・

「わ・・・私も居るのに・・・・・私は・・・・」

エルザは、物陰、性格には岩陰に隠れて、一人暗くなっていた・

「私を除け者にしないでくれ・・・」

というか泣いていた

「ごめん!エルザ!!」

グレイは、すぐに慰めに行った

「お——い!そろそろ行くぞ!!」

ナツは、グレイ、エルザ、凍弥に向かって言った。ルーシィとハッピ―は先に歩き始めていた。そして、ナツも歩き出した

「さあ行こう！」

エルザが三人の先陣を切って歩き出した。その後を追うようにグレイも歩き出した

（また・・・知らない顔を見ることができたな）

凍弥は、そう思いながらグレイ、エルザのあとに歩き出した。山頂まであと少しナツたち一行は、休憩の分を取り返すようにどんどん歩いてく・・・

「あの白いものは何だったんだ？」

「それじゃねエトウヤ」

「何だハッピー!!」

「・・・・・・・・わたがしです!!」

「え?・・・・・・・・エエ——!?!」

「嘘です・・・・・・・・雲だよ!トウヤ!!」

B Y ハッピー&凍弥

第9話 服と飯と親との再会？

ハコベ山 山頂間近

太陽がさんと照り付ける。山の斜面には、氷塊、雪がまだ残っている。ナツたちは疲れを見せることなく山頂を目指して登っていた

「ハアゝ結構来たわね・・・さすがに太陽が近いからこの辺りは暑いわねエゝ」

ルーシイは歩きながら手を団扇がわりにして、上下に振っていた

「そうだなあゝ暑いなあ――」

グレイは、ルーシイの後方を歩いていたが、いつも通り服を脱いでパンツだけの姿で、山頂の方を見ていた

「そうねゝグレイもそう・・・」

ルーシイは、グレイに訊こうと後ろを振り返った。そこには・・・パンツに手をかけ脱ごうとしているグレイがいた

「ギャ――！！暑いのはいいけど・・・そ・・・それ以上はダメゝ！！」

「ん！？どうしたルーシイ？」

「どうしたじゃないわよ！！自分の手を見てみなさい！！」

グレイは、言われるがまま自分の腕に沿って視線を下にやった

「なっ!!」

グレイは、反射的にパンツから手を放した

「ふう危ねえーサンキュールーシー!」

「よかったわね・・あと少しでグレイのイメージが崩壊するところだったわよ」

「さて・・先に進むか!」

グレイは、再び歩き出した

「ちょ・・・」

ルーシーがグレイに言いかけた時

「グレイ!・・ちょっと待って・・」

ルーシーの隣を歩いていた凍弥が久しぶりに口を開いた

「なんだ?・・どうした?」

「ふ・・ふ・・」

(まさか!・!この子あたしが言おうとしたことを・・ハハ・・そんなことあるわけないか・・・)

「なんだ?・・言いたいことがあるならハッキリ言えよ」

す——はあ——

凍弥は深呼吸をした。そして、グレイの目を見た

「ふ．．．服着なよ！！グレイ！！」

（言った．．．あたしが言おうとしたことを．．．言った．．．）

「服？．．．．．なっ！！」

グレイは自分の体を見た。そして、自分がパンツ一丁でいることに気付いた

「ルーシィ！！オレの服知らねえか！？」

「知らないわよ！！」

「そうか．．．どこだよ！！オレの服——！！」

グレイは、慌てて服を探しはじめた

「ナツ——！！ちょっと休も——！！」

「．．．」

ルーシィの声を無視しているのか、返事をせずに一人黙々と頂を目指して歩みを止めようとはしない

「何よ！ナツったら．．．一人先に行っちゃって！！」

すっとルーシィの肩に誰かの手が乗った

「気にするなルーシィ．．．ナツはあーゆー奴なんだ．．．それに．．．」

「

話かけてきたのは、エルザだった

「あーゆー奴ってどうゆう奴よ！・・・それに何？」

ルーシイのツツコミが入った

「そろそろだな・・・」

「そろそろって！？・・・ねえエルザ教えてよ！！」

「まあ見ていれば分かる」

そう言つとエルザは一人先に登っていくナツを見た。ルーシイもエルザの横に立ち同じように、ナツを見た。ナツは、足を止めることなく登っていく。十歩程歩いたところで急にナツの足が止まった。ナツはその場に立ち尽くした。そして、倒れた・・・

「エ——！！！」

「やはりな・・・」

ビュ——ン

「ナツ——！！！！！」

もの凄いスピードでハッピーがナツのところに飛んで行った

「『やはりな』じゃないわよ！！ナツのところに行かなくちゃ！！
行こうエルザ！！」

ルーシイは、エルザの手を握りナツの所に向かおうとした。でも、エルザはルーシイを行かせまいと、逆に力を入れた

「大丈夫だ・・・きっと腹が減って倒れたんだ」

エルザがそう言うと、ハッピーがナツの所からエルザ、ルーシイの元に向かって飛んできた。

「ナツは!?!?」

「『腹減ったあ・・・あ』って倒れた状態で言ってた」

「な・・・私が言った通りだろ、ルーシイ」

エルザはルーシイに向かってウィンクした

「うん・・・凄いね!!」

「伊達にナツと一緒にいないからな!!」

エルザは、胸を張ってちよつと自慢気に言った

「ナツの所に行こう!」

ルーシイは、みんなに言うつと一人歩き始めた。ハッピーはルーシイの後を追って飛んで行った

「仕方ない・・・行くぞ!二人とも!」

エルザは、グレイと凍弥に言うつと歩き始めた

「ほら行こう!グレイ!!」

「え?でもまだオレの服見つかってないし・・・」

凍弥はグレイをナツの元へ連れていこうとする。グレイは服を探したくて、その場に留まろうと必死で抵抗した

「行かないんですか!？」

凍弥は、 그레이의腕を掴んで必死に引っ張る

「いいよ・・先に行けよ」

「そういうわけには、いきません!!」

「はあゝ分かったよ」

「では・・・」

(やっと行けるよゝ)

凍弥は、笑顔で 그레이의腕をしっかりと掴んで歩き出した。でも、 그레이はと言うと

(はあゝもうちょっと下の方探して見ツか・・・すまないな、トウヤ・・・)

!!???

凍弥は手が冷たいことに気付いた。すると、 그레이의腕が氷の腕になっていた

「 그레이!何を!？」

「いや・・・ちよっと下の方を探してくるわ」

「え!?!ダメだよ!」

凍弥は、必死に 그레이の手を離さまいと力を入れた。でも力を入れれば入れる程、氷が溶けて水のせいで余計に滑るようになった。凍弥は、両手を使って掴んだが無駄だった。

ツルッ

グレイは、凍弥の腕をすり抜けると下に向かって落下し始めた。

「すまないな・・・先行つてくれ！！追いつくから・・・」
「あゝあ・・・仕方ない・・・グレイの言った通り先に行こうと」

凍弥は、ルーシイたちの方に向き直ると歩き出した。

「うわッ——！！」

下の方からグレイの叫び声が聞こえてきた。
凍弥は、聞こえないフリをして歩き続けた。

「いやゝ生き返った——！！出発しようぜ——！！」
「そうね！そろそろ行きましよう！」
「そうだな・・・」

みんなその辺にある岩に座って休んでいたが、続々と立ち上がった

「そういえば・・・グレイは？」
「確かに！グレイ来ないな！」

（あの叫び声？まさかあの時グレイに何かあったんじゃない？）

凍弥は、下を向いて叫び声のことを思い出した。そして、急にグレイが心配になって、顔を上げた。

すると、ルーシイの後に・・・ボロボロの服を着た誰かがいた。ナツは、それに気付いたのか、ルーシイの方を指差して言った

「ル・・・ル、ルーシイ・・・後ろ」

「後ろ？」

ルーシイはナツに言われ後ろを見るために体ごと半回転した

「ルーシイ・・・」

「ギャツ――！！！」

ルーシイは後を見たときたん叫び、気を失った。そして硬直して後に倒れようとした

「まったく・・・仕方ねエな」

ルーシイの体は岩肌に当たることなく、服を着た誰かの腕で支えられていた

「まさか？・・・」

凍弥は何かに気付いたようだった。

「ん・・・あれ？あたし・・・」

ルーシイは意識を取り戻した。

「大丈夫か？ルーシイ」

ルーシイの目の前には、さっきの奴がいた。

「ギャッ——！あたしに近づかないで！！！！」

ルーシイは、目の前の奴をビンタすると足を踏んで、ナツたちの元へ走って行った。

「おいおい・・・オレだよオレ」

誰か分からない何者かは前髪を手でバツと上に上げた

「「「グレイ！！？？」」」

そこには、顔色の悪いグレイがいた。みんなは、正体がグレイと分かると近寄っていった。

「どうしたの！？」

実はな・・・オレが服を探しに行った時・・・オレは、下に向かって落下してたんだ・・・【そろそろいいか】と思って、魔法でアンカーを作って両サイドに噛ませたんだ・・・噛ませたまでは良かったでも噛ませた時・・・ビリッ！と言う音が聞こえたんだ・・・オレは音のした方に行ってみた・・・そこには、これがあった・・・

グレイは、自分の服とズボンを指差した

「そんなことが・・・」

「そんなボロボロの服着てるぐらいなら、いつそパンツだけの方がいいんじゃないか？」

エルザは、正しい意見を述べた。でも、グレイは脱ぎたくないらしく・・・自分の服を見た

「いつも脱いでるじゃん・グレイ！」

「あれは、戦う時だけだ！！」

「え！？でも、たまに普通にいる時も脱いでることあるじゃん・・・」

ジ

ルーシィはグレイの隣に行くと横目で見た

「な！！・・・あゝ脱ぐよ！脱げばいいんだろ」

グレイは、上のシャツだけ脱いだ

「うん！そっちの方がグレイらしいよ！！」

「なんだよ・・・オレらしいて？」

「さあゝ全員揃ったな！！よしじゃあ頂上目指して出発！！」

エルザが先頭を切って歩き出した。まずルーシィが気付いた

「エルザ・・・いつの間に・・・」

エルザは、登山をする専用のリュックをからって防止、登山靴を履いていた

「こんなこともあるのかとストックしていたんだ！」

「そうなんだ・・・」

「さあグズグズするな！！頂上は後少しだ！！一気に行くぞ！」

エルザは、再び歩き始めた。みんなも、続いて歩きだした・・・
グレイは、服のことを気にして凍弥に押してもらってやっと歩き出した

ナツ

「着いた！頂上！！」

頂上は割と広く半径25mの円形でここも氷、雪がまだ残っている

エルザ

「ついに到着・・・長かった・・・」

エルザは着いたと同時にいつもの鎧の格好に戻った。

ルーシィ

「ねえ！ドラゴン何処にも居ないわよ・・・」

「ここには居ませんよ・・・どこかに入口があるはずです」

凍弥は、そう言うと入口らしき物がないか探しはじめた。ルーシィは、歩いて頂上の中心に向かって歩き出した

（ん！？ここ踏んだ時の感触が違う！）

「ねえ！みんな！こっち来て——！！」

ルーシィは、自分が居る所にみんなを手招きした。すぐにみんな

集まった

「ねえナツ私が居る所に立ってちよつと軽く燃えてみて！」

ナツは、ルーシイに言われた通り立って、全身に炎を纏った。一時すると、みんなが立っている足元に変化があった。どんどん雪が失くなっていつて、ガラスのような物が足元に広がっていた。

ウギヤ！！

一瞬声が聞こえたと思ったらナツの姿が消えていた。

「あれ？ナツは！」

「ホントだ！どこに行ったんだろーおーいナツ——！」

みんなナツを探しはじめた。一時探しても全く見つからない。そして、結局みんな元居た場所に戻ってきた

「お——い！みんなあ——！」

「あれ？今ナツの声がした！」

ハッピーが一早く気付いた。みんなも耳を澄まして声を聞こうとした

.....

「お——い！誰か——！」

「あの穴からだ！」

グレイが穴に近づいた。穴から中を見ると下の方にナツがいた。

ナツは元気に手を振っていた

「お——い！ナツ！大丈夫か？」

「お—— 그레이！」

「ナツ？そこにいるの！？」

ナツと 그레이が話していると、ルーシイを始め、みんなが穴の所に集まってきた。みんなナツを確認するために押し合いへし合いしていた

バキッ

（なッ！！亀裂？！やばいこれ以上重みが加わわったら・・・落ちる！）

「おい！一回離れる！」

그레이の声は、みんなはナツを見ようと必死で耳に入ることにはなかった。

バキッバキ！

「おい！！！」

그레이は、叫んだ。みんなは驚いて 그레이の方を見た

「一回この場から離れてくれ・・・」

みんなは、一斉に離れようとした・・・

その瞬間^{トキ} -

氷のでできた地面が崩れた。みんなが一斉に動こうとしたから亀裂が広がって崩れたのだろう
グレイを含む五人はナツがいる下に落ちていった

「くそ——!!」

(どうする?この高さ落ちたら怪我すっぞ!)

「アイスメイク・・・」

グレイは、自分の氷を使ってこの状況を打破しようと考えた。

「ロー・・・!?!」

グレイはきつと“道”を造る気でいたのだろう。でもその必要はなかった・・・グレイは、腕を何かに掴まれたのを感じていた

「大丈夫?グレイ!」

隣にルーシイがいた。ルーシイもまた掴まれていた

「これは!?!・・・」

「トウヤだよ!トウヤが助けてくれたの」
「トウヤ!?!」

グレイは上の方を見た。そこには、透明な羽が見えた

バタッ!・・・バタッ!

バタツ！……バタツ！

羽はゆっくり羽ばたき、グレイは足を地面に着いた。ルーシィも同じく再び地面に足を着いた。

グレイは、足を着くと同時に凍弥の姿が見える位置まで移動した

「ス……すげー……」

グレイの目の前には、幻と思えるほどの光景が広がっていた。足は竜の様に鋭く、羽は背中から出ていて、大きく透き通っていてとても美しかった。スーッと地面に降り立った凍弥。脇にはエルザを抱えていた。凍弥は脇に抱えたエルザを放した。エルザは、無事に地面に足を着いた。それを確認すると、凍弥は元の姿に戻った。みんな凍弥の元に歩み寄ってきた

「スゴイね！！トウヤ！」

「ああ……美しかったな！」

「あれも、滅竜魔導士だからできる魔法なのか！？」

グレイは、同じ部類の魔導士としてとても興味津々だった

「いえ……たぶんコツを掴めばグレイも出来ると思うよ……」

「そうか……今度教えてくれ！！」

「い……良いですよ」

ナツは少し放れた場所でボケッと突っ立っていた

「ナツ——！！大丈夫？」

「ああ大丈夫……」

ナツは魂が抜かれた様な感じになっていた

「オレも出来るかな・・・あんなの・・・」

「ん??ほら!・・・みんなの所に行こう」

「ああ・・・」

ナツは、返事をするものの歩こうとしない。ハッピーは仕方なくナツを掴んで飛んでみんなの元へ行った

ナツ達は一行は周りを見渡した。そこは、大きなドーム状の形をしていた

「此処です!!俺とシヴァルトが共に生活した場所・・・」

「え?そなの?じゃあここにそのドラゴンいるをじゃない?」

ルーシイは再び周りに目をやった。しかし、綺麗なドームの中にはルーシイたち以外に誰の姿も見えない・・・

その時 -

頭上から何かが降りてきた。

「何!??」

物凄い風がその場に巻き起こり、吹雪で目の前にながあるか分からなくなった。

【何しに来た人間!】

(この声・・・シヴァルト!?何処に・・・)

「お前に話があつてきた!!」

ナツは、自身の体に炎を纏わせ、吹雪を無効かさせていた。

【ほおゝ人間にしてはやるな・・・滅竜魔法か・・・しかし・・・】

上から降りてきた物は、言ったあと口を細くして何かを吹いた

その時 -

ナツ、ルーシィ、グレイ、エルザ、ハッピー、凍弥は氷のドームの壁を突き破って空を飛んでいた。と言うより町に向かって落ちていっていた

（あれ？オレ空飛んでる？あれみんないる・・・助けなきゃ）

ナツたちは、意識を失っていた。凍弥は、さっきの様に能力を使おうとした。でも、もうすでに魔力が残っていないくて使うことが出来なかった

（ダメだ・・・力が出ない・・・シヴァルト・・・）

凍弥は目に涙を浮かべながら気を失った

第10話 目を覚ましたらそこは・・・（前書き）

内容はあまり濃くないです
すいません

第10話 目を覚ましたらそこは・・・

「凍弥・・・凍弥・・・」

（・・・そうだ・・・オレ・・・シヴァルトと会って・・・山から落ちたんだ・・・この声は・・・天からの）

「凍弥！・・・」

（あ——オレ・・・死んだのか・・・これからどうなるんだろう・・・）

凍弥は何もない暗闇の世界に一人、目を閉じ何かを考え始めた。すると、神々しい光が凍弥の前に現れた。凍弥は目を閉じていたが、光が眩しすぎて目を閉じている状態でも光があることには気づいた。そして目を開け目の前に輝く光を見た

（何だ——？あの光は・・・天からの使いか何かか？）

光の方を目を細くしてみると・・・輪郭だけだが、中心に丸いものがあるのが見えた。しばらくの間、光を見ていると光が少しずつ大きくなっていることに凍弥は気づいた

（あれ？・・・さっきよりデカくなってないか！？）

そう思っている間にも、光は大きくなる。そして、暗闇だった世界をどんどん明るくしていく

「凍弥！・・・凍弥！！」

「また声？何処からだ？」

「・・・・・・・・凍弥！」

！！

凍弥は光の方を見た

「まさか！・・・光あれからなのか？」

どんどん光は大きくなる。というかどんどん凍弥の方に近づいてきている。そう！光は、元々から大きかった。それが遠くにあり近づくことで、大きくなっているように見えるだけ、いわゆる目の錯覚

「オレ・・・どうなるんだ！！？」

凍弥は光が近づくにつれて、どんどん焦ってきて、周囲を歩き始めた

壊れた・・・

いつもは冷静な凍弥がここまで焦るのは異常だ。脳内はパニック状態で何か考えることすらまともに出来ない。光は凍弥のすぐ傍まで近づいていた。暗闇だった世界は光が近づくにつれてなくなっていた

「もう無理！！」

何が無理かと言うと目を開けている事なのだろう。凍弥はすぐに目を閉じた。しかし光の照度は凄まじく、目を閉じていても限界があった

すっ！

凍弥は光に対して背中を向けた。「せめて目は守らないと！」っ
と思ったのだろう、とっさの判断だった。そして、光は凍弥をまば
ゆい光で覆った

「凍弥・・・凍弥・・・」

光の中で声が聞こえた。それにさっきよりハッキリとした声だ。
凍弥は目を開けた。目の前に広がるのは暗闇の世界ではなく、純白
の世界だった。しかし、相変わらず何もない。そして次の瞬間―再
び凍弥の体を光が包んだ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

凍弥は突然の事で声も出なかった。ホントに一瞬・・・光が凍弥
の体を包んだ。凍弥は目で眩しくないと感じとったのか目を開けた。
そこには見覚えのあるポスターがあった

（ん？ここはまさか？・・・）

凍弥はポスターを見つめたまま動こうとしない

「凍弥！・・・凍弥！！いい加減起きなさい！学校遅刻するよ・・・
もう・・・」

凍弥は首を横に動かした。見覚えのある姿が視界に入った

「母さん！？・・・」

凍弥は目の前に自身の母親がいることに驚き、上半身をベッドから起き上がらせた

「何驚いてるのよ・・・驚いてるのはこっちよ！夜中に凍弥の部屋からドンツ！っていう音がしたから行ってみたら、凍弥が呼吸が荒くてとてもきつそうだったのよ・・・今は大丈夫そうね」

「そんな！・・・」

（いつ現実^{じじつ}に戻ったんだ??）

「嘘じゃないわよ！・・・ほら早く準備して！学校遅れるやよ・・・」

「

そういうと凍弥の母親は部屋から立ち去って行った

「これは・・・夢か！？それとも・・・」

凍弥は自分の頬を思いつき^{つね}抓った

「イタタタツ！！夢じゃない・・・」

凍弥は頭の中がごちゃまぜになってわけが分からなくなった。しかし、学校に行くために制服に着替え始めた

（まあ・・・とにかく学校に行こう）

そして、着替え終わると机の上にあった鞆とハッピーのキーホルダーの付いた携帯を手に取るとリビングに向かって歩き出した。し

かし心の中では、ナツたちのことを気にかけていた・・・

第11話 無愛想

学校への道のりを歩く。学校に向かう生徒。たまに道に立っている先生。なんのために立っているかは知るよしもない。それは決して変わることのない不変の光景。凍弥はそれを見飽きたのか、下を向いて歩いて行く

「お——い！凍弥ッ——！！」

誰かが大声で凍弥の名前を呼びながら走ってくる

（誰だよ・・・今誰とも話したくないのに・・・ッたく・・・）

「凍弥！」

声がしたと思うと、声の主は凍弥の肩に手をのせてきた

「誰だよ・・・」

凍弥は沈んだ声で声の主の方を見た

「ニヒヒ」

「何だ中田か・・・」

そこには、ニヤツと笑った中田がいた

「何だ？凍弥・・・ノリ悪いな・・・どうかしたのか？」
「別に・・・」

中田の言うことに耳を貸すことなく凍弥は学校へ向かって歩く

「どうしちゃったんだ？あいつ・・・」

中田は少し離れて、凍弥の後をついていく。凍弥は相変わらず下を向いて歩く。二人の距離は微妙で変な沈黙、気まずさが二人を包んでいた

・・・・・・

カタッ

突然凍弥の歩く足が止まった。後ろを歩いていた中田も足を止めた

「おい！・・・」

凍弥は前を向いたまままだ

「ん？・・・」

中田は凍弥の背中を見ながら首を横に傾げた。そのとき凍弥が振り返って、中田の方を見た。もちろん中田も凍弥の方を見た。というよりもただただ前を見ていた

「おい！・・・お前・・・」

「お前って何だよ・・・凍弥・・・」

「何で俺のあとをつける？」

「『あとをつける』って・・・俺はただ・・・」

「何でだ！答えろ！！」

凍弥の声はどんどん大きくなっているように思われた

「俺は！ただ学校に行ってるだけだ！誰もお前の後なんてつけてねエよ！！！」

中田はキレた・・・滅多にキレない中田が・・・キレた

「・・・・・・・・」

凍弥は中田の方を見て、黙り込んでいる。再び凍弥と中田との間に沈黙が流れた

（こッ！これはまさか我慢対決か？・・・よし！やってやろうじゃないか！！）

ちよつと頭のネジが緩んだ中田。と言ったたの馬鹿だ。中田は凍弥の目を見た。凍弥も中田の目を見ていた。そして凍弥は中田に背を向けた

「あつ！・・・ちよつ！・・・」

中田はその場で、遠ざかって行く凍弥の背中に向かって、手をのばした。もちろん背中に届くわけがない。凍弥はそんなことがあったなんて知らずに、学校に歩いて行く

「何だよ・・・凍弥のやつ・・・」

中田は立ち止まったまま、凍弥の背中を見ていた

凍弥にとって意味の無い日々、一日が始まった。授業に出席するものの1時間、1時間、窓から空を見て何かのことを想っているようだ。きっとナツ達がどうなったか心配で授業なんか受ける気にならなかったのだろう。凍弥はとにかく家に帰りたかった・・・ナツたちのいる世界に行きたいと思い、ナツやグレイみんなに会いたいと想っていたのだろう

第12話 幽体離脱？

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

凍弥は学校から家までの道のりを走っていた。無我夢中で走る。周りからの視線なんて気にすることなく全力で走る・・・

数分後――

家に到着した。凍弥は玄関の鍵を開けると急いで中に入った。靴を脱ぎ捨て部屋に向かう。

いつも通り家の中は暗く、窓は閉まっているはずなのに外より少し涼しかった

ガチャッ！

部屋のドアノブに手をかけ、そのまドアを開けた。凍弥は部屋の中に入ると、すぐにぐにベッドに腰を下ろした。そして、第一ボタンを外しリモコンを使ってクーラーを入れた。そのまま、FAIRYTAILの漫画第一巻を手にし読み始めた。凍弥はまだ知らなかった・・・大事な“物”が無くなっているという事実を・・・いつも通り2時間で読み終わり、そのままベッドに横になり、目を閉じた

（きっと・・・また会えるよね・・・みんなに・・・）

そして凍弥は眠りについた

「う！眩しい！」

凍弥の前に突然眩い光が・・・そして、突然光が体を覆った

「オイ！！目を覚ませよ！！いつまで寝てんだよ！！」

体を包帯でぐるぐる巻きにした少年が誰かの両肩に手をやり、体を揺すっていた

（あれここは？あれはナツか？それにみんなも・・・）

凍弥の目の前には、病院のベッドを囲っているFAIRYTAILのみんながいた。ナツはもちろん、グレイ、エルザ、ルーシィ、ハッピーは至るところに包帯を巻いていた。そして、みんな下を向いたまま顔を上げようとしない

（みんなどうしたんだろう？元気がないような）

「早く戻ってこいよ！！トウヤ！！！！」

ナツは叫んだ。せして、そのまま病室の床に崩れ落ちた

（オレ！？オレはここにいるのに）

「おい！オレはここに居るぞ！！！！」

凍弥はみんなに呼び掛けた。でも、誰も見向きもしない

「ゴメン・・・トウヤ・・・オレのせいで・・・オレが無理矢理誘ったから・・・オマエはこんなめに・・・」

ナツは座ったまま泣き崩れた。一緒に山を登った4人もナツにつられて、目から涙が零れた

（泣いてるの？ナツ・・・）

「さあ行こう・・・ナツ・・・ここにいても何も変わらないよ・・・」

「

隣にいたハッピーがナツに言った

「ああ・・・信じてるからな。帰って来るって」

ギルドのみんなは続々と病室を出ていく。凍弥はただ見ることにできなかつた。ナツとハッピーは最後まで残った。そして、ナツは立ち上がるとポケットから何かを取り出し、頭の近くにそれを置いた。ナツは立ち上がり病室を後にした

（なんだあれ？ここからじゃよく見えない）

凍弥は歩いてベッドに近づいた。そこで凍弥は目を疑った。一歩あとずさった。そこには自分がいた。FAIRYTAILにいた頃の姿で

「なんで俺自身が!？」

凍弥は手を伸ばした。触れることは出来なかつた

「どういうことだ？何で？」

と思っっている時に、ふと頭の方に目が行った。そこにはシヴァルトから貰ったリングがあった。凍弥はリングに触れようと、手を伸ばした

その時――

パリッ

見た感じ何も問題のないはずのリングが、突然二つの割れた

「え？そんな・・・シヴァルトからもらったのに・・・」

その時。また突然光が凍弥の体を覆った。凍弥は余りの眩しさに手で目を覆った

「朝だよ！起きないと遅刻しちゃうよ・・・朝だよ！起きないと遅刻しちゃうよ・・・」

ハッピーの形をした目覚まし時計がハッピーの声で7時を告げる

「・・・」

凍弥は目覚まし時計のハッピーの声で目を覚ました

そして、起き上がるといつも通り着替えて何も無かったかのように家をあとにして、学校に向かった・・・

第13話 新キャラ登場・・・中田・・・乙（改）

「起立、礼」

「ありがとうございます」

クラスメイトは皆、先生に帰りの挨拶・一礼でも凍弥はただ起立するだけで、礼も挨拶もなかった。挨拶が終わるとすぐにカバンを手に取り帰ろうとする

「待てよ！凍弥！」

突然何処からともなく中田が現れ、凍弥の行く手を阻んだ

「ん？・・・なんだよ」

「『なんだよ』じゃねエよ！・・・どうしたんだよ！凍弥・・・最近付き合いわりいぞ・・・街とか行こうぜ！なっ？」

「すまん。ちよつとあつて・・・ごめん」

凍弥は中田に一言詫びると横を通り、教室の扉に向かった

「ちよ、凍弥！・・・」

中田は凍弥を呼び止めようと振り返った。しかし凍弥は既に教室から出ていて、姿が見えない

「凍弥め！でも・・・まだ策はある！今日こそあいつに何があったか聞き出してやる！！」

すぐさまポケットから携帯を取り出し、誰かに電話し始めた

「あ、もしもし。陽那ちゃん？中田だけどこっちは無理やった・
うん・・あとはよろしく！」

話が終わると中田は携帯をポケットに入れ、自分の席に戻った。
そしてカバンを手に取ると教室を後にした

「・・・」

凍弥は下駄箱に続く廊下を、一人考え事をしながら歩く
あの夢のようなホントに起こったような出来事以来、中頭の中は
これで一杯。かなり気になっているようだ。でもリングが壊れた今、
あっちの世界に行こうと思っても行くことはできない

「凍弥く——ん！待ってえ」

誰かが走ってくる。それにしても凍弥の名前を呼ぶなんて一体誰
なのだろう。クラスでもインキャラ扱いされ存在感も無く、リアル
（現実）ではいつも中田としか話さない。とイメージしていたのに
思い違いだったのだろうか・・

「ん？」

凍弥は声のした方に振り返った

「げっ！ひ、陽那！？」

少女が凍弥の元へ走ってくる

「おい！あれ」

「あれ噂の一年じゃね？」

「おい、マジかよ！めちゃくちゃかわいいじゃん」

「彼氏いんのかな？」

廊下を歩いていた男子生徒は立ち止まり、皆少女に視線を向けていた

それを気にすることなく少女は凍弥の元へ走る

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・やっと追いついた」

「お、お前！・・・」

凍弥は少女の顔をジッと見つめる

「ん？～なに～私の顔に何かついてる」

「・・・誰！？」

少女に問う

「え！・・・私だよ～凍弥くん。忘れたの」

「ん～すまん。分からん・・・」

凍弥は頭を抱え込む。実際の所は頭の中にしつかりと名前は浮かんできた

「そつやっておちよくらないでよあ」

「おい！誰だよアイツ！」

「あんなカワイイ奴と話しやがって。彼氏か？」

「見たことねえ顔だなー！一年かあ？」

男子生徒が凍弥に対して視線を向ける

（ヤバいな。スゲー視線を感じる。しかもかなりヤバい視線を・・・
ここは一まず・・・）

「陽那！」

「なあに？」

「場所を移すぞ」

凍弥は陽那と言う少女の手を握りしめ、走り出した

「凍弥くゝん。一つ質問していい？」

「なんだ？」

「靴は？」

「靴？」

凍弥は言われるとすぐに視線を下に向けた

！！

（あ・・・履いてない・・・）

「何あの人？靴も履かずに外に行こうとしてるよ・・・」

「それに女の子も一緒だよ・・・何がしたいんだろう？」

下駄箱の近くにいた数人の生徒達が痛い視線を注ぎつつ小声で話

している凍弥に聴こえないように話していたつもりだろうが、凍弥には全て聴こえていた

「ひ、陽那・・・靴履いてこい。あゝあと靴を履いたら校門に集合な」

「はあゝい」

陽那と言う名の少女は凍弥に敬礼して、自分の靴がある下駄箱に向かった

（あつぶねエゝもう少しで靴下のまま外に行くとこだったあゝしっかし。変に目立つちゃったなあ・・・はあ・・・高校では目立つようなことしたくなかったのにゝとほほ）

そんなことを思いながら凍弥も自分の靴がある下駄箱に向かう

「おゝい。凍弥く――ん」

少女が校門の近くで手招きをしながら、陽気な声で凍弥の名を呼ぶ

「そんなに大きな声で呼ばないでくれよ。今行くから」

凍弥は普通の速さで歩き、少女の元へ向かう

それでも周りにいる男子生徒の視線は、廊下にいるとき変わらなかった

（早く。ここから去りてエー！）

そんなことを思っている矢先

ぎゅ

（何だ？右腕が何かに挟まれてーって！ん？）

「・・・・・・・・」

凍弥は即座に自分が置かれている状態を理解した。言葉に出しはしなかったが、突然のことで叫びそうになった。でも凍弥は我慢した。しかし凄い顔をしていた

「ちよつとー大丈夫ー？」

腕は見事に少女の胸に挟まっていた。そして、少女は異常に顔を近づけてくる

「・・・・・・・・」

凍弥は放心状態に陥っていた。それでも凍弥は、自分の目に映る景色が少しずつ変化しているのに気づいていた

「重いよー」

少女が凍弥の腕を掴み、必死になって凍弥の体を引く。凍弥は放心状態だったが、このままじゃ転けると体が判断し、転けないように足だけは動いた

「あれ？ここは？」

凍弥は放心状態から元に戻った。周囲を見るとブランコや滑り台といった遊具が視界に入った。

「あれ？陽那は？確か・・・校門で待ち合わせして、そして」

凍弥は記憶を辿る。そして思い出したのか、突然顔が赤くなる

ぴちっ

「冷たッ！何だ!？」

凍弥の右頬に何か冷たい物が触れた。すかさず触れた物の正体をつきとめるために、右手を右の頬に持っていく

「起きてんだあゝつまんな」

後ろから声がした。凍弥は咄嗟に振り返る

「なんだ・・・陽那・・・かよ・・・サンキューな」

「なんだって何よ」

少女はしよげる

『この辺で凍弥に陽那と呼ばれている少女について紹介しよう』

中田。何処からともなく登場

実は陽那から連絡をもらい公園まできていた。今は二人の近くにある林に身を隠している

- 旭 陽那 -

凍弥と幼馴染みで、小学校から同じ学校に通い、今は俺たちと同じ学校の特進科に通っている。歳は16。髪は茶髪で肩ぐらいまでの長さ。身長：160cmでスタイル抜群。今まで会話を聞いてきて分かるように、陽那ちゃんは天然。入学そうそう『かわいい女子が入ってきたらしいよ』と校内に広まって、今や全

男子生徒の視線的。俺もちゃっかり狙ってたり・・・ハハハ。陽那ちゃんはどう思っているか知らないけど、凍弥は陽那ちゃんのこゝと嫌いじゃないみたいです俺といるときよりも嬉しそうな顔をしているし、スゴく楽しそうだし・・・くー！好敵手め！しかも幼馴染みとか言うチート持ち・・・紹介はこれぐらいにして、さて凍弥がこれからどうするかが今一番の問題

中田は二人がいる方に視線を移した

「あれ？いない！ど、何処行っただーあの二人」

立ち上がり周りを見渡す。しかし二人は何処にもいない

「くそー・・・あつ！」

中田はポケットから携帯を取り出し、誰かに電話をかけ始めた

プルルルルル・・・プルルルルル・・・プルルルルル・・・

「あれ？出ない？ちゃんと音は鳴ってるのに・・・」

その頃、中田の電話した相手はというと

ブー・・・ブー・・・ブー・・・ブー・・・

「何か携帯鳴ってないか？」

「ん？」

陽那は制服のポケットに手をやる

ポケットの中ではマナーモード状態の携帯がブーとバイブレーション

「あゝホントだゝ誰だろう？」

陽那はそのままポケットから携帯を取り出し、着信相手を確認した。そこには『中田くん』とあった

陽那は名前を確認し、そして・・・切った

ブー。ブー。ブー。ブー。

「あれ？切られた？・・・なんでだよ！何で切るんだよー」

中田は近くにあったベンチに座った

「何で切ったんだよ・・・『何かあったら連絡してね』とか言ってたのに・・・いざ連絡したら切るのかよー・・・」

「よかったのか？切って？」

「いいのゝいいのゝ」

「そうか・・・で、何処行くんだった？」

「あれゝ何処に行くんだっけゝ忘れちゃった」

「おいおい。しっかりしてくれよ・・・」

「へへへ」

「そうだ！・・・」

「なに？」

「帰ろう！！」

「え、何で」

「もう暗くなってきたし。ほら、今日送ってってやるから」

「やったあ！」

（全くー単純な奴だなあ陽那は）

「ほら行くぞー陽那」

凍弥は、歩みを止めて喜ぶ陽那を呼ぶ。そして再び歩き始める

「あ、待ってー凍弥くん」

陽那は急いで、歩いて行く凍弥を追いかけた

一方見捨てられた中田はというと・・・

ベンチ一人座り、下を向いて落ち込んでいる中田。周りは暗くなり公園にある電灯が一つ一つ点灯し始めた

「あゝ暗くなってきたな、今日はもう帰ろう・・・話は明日する」とにしよう」

中田は立ち上がろうとした

「あれ？」

「ふんぬッ——！！！」

もう一度立ち上がろうとした。しかし中田はベンチから立ち上がることができない

「何でだ？」

何度も立ち上がろうと試みる
しかし結果は同じ

（何でだよ！）

中田はベンチとその周辺を見渡し始めた。周りには何もない。しかし中田は何か白い物がベンチの右側の方に貼つてあるのに気付いた。中田はその場から白い物を見た。でも暗くなつたせい、字が書いてあるのは分かるのだが何て書いてあるかよく見えない。書いてある字を読もうと目を凝らす中田・・・するとベンチのすぐ傍にあつた電灯が点いた

「お！明るくなった！これで読めるな」

中田は字を読み始める

「えーっと・・・何々ペンキ・・・塗り立て・・・」

（塗り・・・立て・・・？）

中田は理解するのに時間がかかった
しかし理解はした

「どうしよう・・・このままじゃ家に帰れない・・・」

中田は案が尽き諦めていた

その時――

ニヤ――

何処からか猫の鳴き声が聴こえた

「……」

中田はその場から立ち上がるとする

しかし、ペンキのせいでズボンが引っ付いて立つことが出来ない。
無理と分かると、中田は鳴き声のした方向を見つめた

ニヤ――

声はベンチの前の雑木林から聴こえる。見つめる方向から猫の鳴き声がした。鳴き声はさっきよりも大きくなっていた

ゴクッ！……

中田は固唾を飲み、暗闇から近づいてくる鳴き声の主を待ち構える

ニヤ――

ベンチから直線で10m程離れた所にある電灯の下に何かの姿を現した

「……」

中田はそれを見た瞬間、体が硬直してしまった。それはどんどん中田の元へ近づいてくる。そして残り3mという距離になった時！中田は硬直が解けた。目の前にいるものを確認し、思いっきりベンチから立ち上がった

ビリッ

何かが破ける音がした

中田は無事にベンチから立ち上がることができた
そして急ぎ足でその場から立ち去った

にゃ〜？

ベンチの前には子猫が座っていた。そして、ベンチには一ヶ所だけ黒い物があつた。みなさんのおきずきの通り、中田が履いていたズボンです。当の本人は気づいていないようですが、まあ気づいたらさぞ驚くでしょう。猫が苦手なんて変な人ですね〜FAIRYT
AILEでもハッピー出てくるのにー
大丈夫なんでしょうか？

「な！なんじゃこりゃ——！！！！！」

中田は家に帰り着き、ズボンを脱いで初めて破けていることに気がついた

凍弥は陽那を家まで送り、自宅に真っ直ぐ歩いていた
家のそばまで来たとき、道に月明かりを浴びて何か光っているものが目に入った

凍弥はその光る物にゆっくり近づき、そして・・・手を伸ばす

カチャ

手に取った。しかし月明かりだけではどんなものか分からず、街灯が近くにあったからそこまで歩いた

街灯に近づくにつれて、その灯りでどんどん手に取った物の正体が判ってきた

「ん！・・・なんだこれ？」

凍弥は街灯のすぐ真下にいて、しっかりとその目で手に取った物を確認することができた

それは長い紐があり、石とつながっていた。ペンダントなのだろう。透明で天然石を使っているようだ。表面も少しゴツゴツしていて、先は少し鋭利で危険そうだ

目を凝らしよく見てみると、ペンダントの中に龍紋が刻み込まれている様に見えた

（なんだこれ？・・・誰かの落とし物かな？もしそうなら警察に届けなくちゃ）

凍弥はポケットにペンダントをしまおうと、手で龍紋の見た天然石を掴んだ

「痛ッ」

カラン・・・カラン

凍弥は声と同時にペンダントを道に落としてしまった

「あいたたた〜切っちゃった・・・」

凍弥の右手の人差し指から出血していた。応急処置として指を口に入れた

切ってしまったのはペンダントの先だろう。道に落ちたペンダントは、先が凍弥の血で赤くなっていた
凍弥は左手でペンダントを拾い上げた

「あちゃ〜汚しちゃた・・・どこかに水道ないかな」

凍弥はペンダントについた自分の血を洗い流したくて、近くに蛇口や公衆トイレがないかさがしている。残念ながら凍弥の近くには蛇口も公衆トイレもなかった

「あ！そうだ・・・家に持って帰ろう」

独り言を呟くと家に向かって歩きだした。この時凍弥は気づいていなかった・・・ペンダントの龍紋が微かに紅く光っていたことに
そして

このペンダントは一体何なのだろう？そして誰の物なのだろう？

第14話 ペンダント

「ただいま・・・ッて。誰もいないか・・・」

玄関の扉を開け中に入る。中は真っ暗で何も見えない・・・靴を脱ぎ、暗闇の中を歩いていく
ある一室にたどり着いた

力子

音とともに視界が明るくなった
すぐに手を伸ばし、蛇口をひねる

ジャ――

勢い良く水が流れ出す
凍弥はポケットに手を入れ、血のついたペンダントを取り出した
まだ凍弥の血が着いてる
すぐさまペンダントを水に浸け、手で擦った
まだ血がしっかりと固まってなかったおかげで無事に血を拭きと
ることができた

「ふう〜とれたー良かったーでも・・・」

（一体誰の物なんだろう？何か高そうだし・・・きつと持ち主探してるよなー）

「よし！明日交番に届けよう！今日はもう寝る」

そう言つと、凍弥は再びペンダントをポケットに入れた。そして電気を消してその場を後にした。真っ暗になった家の中を歩き自室に向かう凍弥・・・その時凍弥のポケットの中で龍紋が紅く光っていた。凍弥は自室までの道を上手く歩くため、精神を集中させていた。そのためポケットで起こっていることに気づくことは無かった・・・凍弥はそのまま部屋に着くと制服を脱ぎ、着替えるとそのままベッドにバタンキュー。眠りについた・・・その日は珍しく夢を見なかった

一日が終わり、そして新たな一日が始まる

「おはよー」

元気よく凍弥がリビングに入ってきた

「え！？どうしたの！アンタが自分から起きてくるなんて・・・あ、あ、あ、アンタ！ホントに凍弥かい！？？」

リビングにいた凍弥の母親は立ち止まり、凍弥の顔を見て問う

「何言つてんだよ・・・凍弥だよ・・・凍弥！！」

「まだ朝ごはん出来てないわよ」

「いいよ！出来上がるまで部屋にいるから」

そう母親に告げるとリビングを後にし、自分の部屋に向かった。自室に戻ると直ぐに身仕度を始めた

直ぐに学校に行く準備はできた。そして、机に置いていた携帯を取ろうと机に視線を移した

そこにはあり得ない物が携帯の隣にあった・・・

「え！？・・・なん・・・で・・・」

机の上。携帯の隣には・・・昨日制服のポケットに入れっぱなしにしていた龍紋のペンダントがあった。凍弥は直ぐ机に歩み寄りペンダントを手に乗せ、顔の位置ぐらいまで手を上げた

「これ・・・確かに昨日拾ったやつだよな？・・・」

凍弥はしっかりとペンダントを見て、確認する。どうみても昨日拾ったペンダントで間違いない

「凍弥ーご飯出来たわよー！」

「はい！」

凍弥はペンダントのことを気にながらも机の上に置いて、リビングに向かった

「はー・・・どうしようかなーこのペンダント・・・とりあえず警察に届けるか・・・」

いつもより早く家を出て、近くにある交番に向かう。凍弥家から交番までは5分の距離にある
学校とは逆方向だが仕方ない・・・

「あれ？・・・ない・・・」

無事に着いた。しかしそこに交番は無かった・・・

「いつ無くなったんだろ？ー随分と来てないからな・・・どうしよう・・・」

凍弥は一先ず進路を学校に向け、歩き始めた

（うわーミスった——この時間人多ッ！！）

周りを見ながら一人おどおどしていると・・・目の前に見覚えのある姿を発見した

（あれは！・・・）

凍弥は恐る恐る目の前にいた女性の肩に手を伸ばす

！！???

「あゝ凍弥くん。おはよう」

「おう・・・陽那・・・おはよう」

明るく元気な声であいさつをする陽那

（よかったあー陽那がいて・・・ただ・・・またあの視線を感じる）

凍弥は陽那の隣を歩く

何かを感じ後ろに視線を移す。そこには同高校の男子生徒がヤバイ視線を・・・

（耐えられん！・・・早く学校に行こう）

凍弥は陽那の手を握り、少し早足で歩き始めた

「ちょ！何？凍弥くん・・・」

陽那は突然のことで驚いたが、笑顔で凍弥の後を着いていく

（何か・・・また俺・・・浮いてない？）

そう思いながらも学校へ歩く

・同時刻・凍弥の自宅・

ピンポーン

誰かが玄関の前に立ち、ドアホンを押す

「はい・・・」

玄関の奥から声がする

ガチャ！

「はい・・・あら！中田くん」

「おはようございます！！おばさん」

玄関の前にいた少年は一礼した

「いつもありがとね・・・でもねー今日はもう学校に行っちゃっ

たの・・・」

「え！？そうなんですか？・・・わかりました」

「ごめんねー」

「いえいえ・・・それでは失礼します！」

一言告げると凍弥の家を後にして、学校に向かった

（凍弥！何があった？どうしたんだよ・・・お前が俺を置いていくなんて・・・）

「凍弥——！！！！！」

突然、中田は凍弥の名前を叫んだ！散歩をしていた近所のおばさん、学校に通う小・中学生が立ち止まり、中田を危ない目で見

「ふ」

（やっと学校着いた。もう・・・今日みたいなのは嫌だ）

凍弥は教室の自分の机に頬をのせ、外の景色を見つめていた

（あゝなんか眠い・・・）

突然、目蓋が重くなり、そのまま目を閉じ・・・眠りについた

第15話 学校で見た夢

「うつ・・・ここは？・・・」

凍弥は・・・未知の世界に一人うつ伏せに倒れていた。肘をついて、周りに視線を移す

しかし、霧がかかっている何も見えない

（冷たッ！）

肘をついて体を支えていたが、肘を床？地面？から離してしまっただため、再びうつ伏せに後戻り、凍弥は立ち上がった。そしてもう一度周りを見た

「リアルに、ここ何処だよ・・・にしてもここ寒いな・・・」

【オマエは誰だ・・・】

後ろから声が聴こえた。凍弥はすぐに振り返った。背後には霧。せの中には何かの影があった。その大きさは尋常ではなく、もう化物レベル。凍弥は一步後ずさり、身の危険を感じたのか、体をビクビクと震わせていた。目らしきものが赤く光っていて、その目は凍弥を捕らえて、逃がさない

【もう一度問う・・・オマエは誰だ！】

影は凍弥に問う

「・・・・・・・・」

しかし凍弥は、恐怖のあまり答えることが出来ない

【・・・・もうよい！・・・・早くこの場から立ち去れ！此処はお前のような奴が来る場所ではない・・・・】

そう言っていると影は姿を消した

ガタンッ

影が消えると、凍弥は緊張が解けたせいか、体の力が抜け膝から崩れ落ちた

「・・・・・・・・」

凍弥は放心状態に陥っていて倒れ、そして意識を失った・・・

「おい・・・・・・・・凍弥！・・・・凍弥！！」

（誰だよ・・・・俺の名前を呼ぶのは・・・・）

「凍弥！！」

「！！・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ」

「おう！やっと起きたか・・・」

「中田？」

「おう！テスト前なのに寝るとか余裕だなあ？」

凍弥の目の前には中田がいた

（あ・・・そうだ・・・確か俺眠くなって、一限目の始めたに寝ちやつたんだ・・・）

「次の授業は何だっけ・・・中田・・・」

前の席に座っていた中田に聴く

「なぐに行ってるのか？この人は・・・」

「だって、そうだろ・・・確か俺が寝たのは一時限目の始め。ということは、次の授業は二時限目ってことになるんじゃないのか？」

「なーに言ってるんだよ・・・周りを見てみろよ！」

凍弥は中田に言われるがまま、教室内を見渡した

「昨日から始まったドラマ観た！？」

「観た。観たー結構面白かったよねー」

「昨日出た新しいゲーム買った？」

「あゝ買ったよ。今あるよ！」

「えゝまち！？飯食ったらさせて」

「別にいいよ！」

「っしやー！！」

数人の男子、女子が集まって昼食をとっている。とても楽しそうだ

「なつ。これで分かっただろ？」

「あ・・・ああ・・・」

凍弥は今が何をする時間なのかやっとな理解した

「んで。どうするよ、昼食」

「どうする。って何を？」

「購買に行こうぜ！」

中田は立ち上がり、購買部がある方向を指指し凍弥を誘う・・・が

「嫌だ・・・一人で行ってくればいいじゃないか」

「そんなこと言わずにさあー行こうぜ親友！」

中田は凍弥の肩に手を置き、何とかして行かせようと説得する・・・が

「断固として断る！一人にしてくれないか・・・いろいろと考えた
いことがあるから」

机の横に掛けていたカバンに手を入れた。凍弥は何かを探している

「分かった・・・」

中田は立ち上がり一言告げると、凍弥の前から立ち去った。その後ろ姿は少し寂しそうにも見えた

凍弥はカバンの中から包みを取り出し、机に置いた。そして包みを開き、一人弁当を食べ始めた・・・

時は過ぎ―現在は１６時を回ろうとしている

「今日も一日終わった〜さてと。帰るか」

凍弥はカバンを手に取り、教室を出るため後ろにあるドアに向か

って、歩き出す。ドアは微妙に開いていて、それを開けるためにドアに手を掛け、ドアを開けようと手に力を入れた

その時――

ド――ン――！

教室の前方にあるドアが勢いよく開いた

「ハア……ハア……ハア……凍弥くん居る？」

「オレ？」

凍弥は前のドアの方を見るために1、2歩下がった

「げっ！陽那！？」

「あー凍弥……くん……ちょっと！……今日……一緒に帰ろう……はあ……」

陽那は手を膝に置き、息を荒くして言う

「まあ……とりあえず深呼吸しろ！」

「す――――はあ――――」

「ちよつとは落ち着いたか？」

「うん！大分楽になったよ！ありがとう」

陽那は満面の笑みまでとはいかないが、笑顔で凍弥に感謝の意を表した

「そうか……じゃあな」

「うん。じゃあね……ってあれ……あ……！ちよつ

と凍弥くくん！待って」

凍弥はドアを開け下駄箱に向かって歩き出した。陽那は凍弥を追いかけて、教室を後にした

（もう昨日みたいな目に遇いたくないからな！陽那には悪いが・・・
ダッシュュ！！）

「あゝ逃げないで！大事な話なの〜！」

今まで早足で凍弥を追っていた陽那だったが、走り出した凍弥を見て陽那も早足から走りにギアチェンして凍弥を追いかける

（捕まってたまるか！！もう二度とあんなのはゴメンだ〜！）

凍弥は走りながら昨日の下校時のことを思い出していた

「待って〜」

凍弥は走りながら後ろをふと振り返った

「おいおい！・・・マジかよ！！——」

凍弥は運動神経は悪い方ではなく、なかなか足も速い。しかし、凍弥と陽那の距離はどんどん縮まっていく・・・凍弥のスピードが落ちたのか？・・・それは否！陽那が凍弥よりも速いのだ！陽那は天然だが成績優秀、運動神経抜群・・・いわば天才

これには勝とうなど不可能

（流石に、はえー！ならば！）

凍弥は階段に差し掛かった、右手でしっかりと手すりを握り、勢いそのままに階段を降りていく

因みに凍弥達1年は二階建て校舎の二階にある

（どうだー！）

陽那は階段に近づくとスピードを落とし、二段飛ばしで階段を降りていく。陽那は運動神経は良いが、危険なこと、無理なことはしない。それを利用した凍弥の策略

- 下駄箱付近 -

「はぁ・・・はぁ・・・」

凍弥は下駄箱に手をかけ、呼吸を整えていた。下駄箱にくることは出来たが、体力の使いすぎではてていた。足は速いかもれない・・・が、しかし、体力は常人以下

「凍弥く〜ん・・・見つけた」

後ろから聞き覚えのあるイントネーションが・・・

「はぁ・・・もう無理・・・」

凍弥は諦めがついたのか、ゆっくりと自分の名前のついた所から靴を取り出した

（今も昨日と同じ視線を浴びなきゃいカンのか・・・思い出しただ

けで・・・ギャー)

「じゃあ・・・行こ」

陽那は凍弥の手を握りそのまま、下駄箱を飛び出した

「おい！おい・・・スタミナないから・・・ゆっくり頼むよ」

「わかった・・・早足で行こー！」

陽那は早歩きに一段階落とし、凍弥の手を引いていく。それでも今の凍弥にとつては、辛かった。凍弥は頑張って陽那のスピードに合わせて歩いていく・・・でも、どうしても周りからの視線が気になる。また昨日と同じ視線を浴びていた。凍弥は俯いて視線又は声を気にしないようにしながら陽那に引かれるがまま歩いていく。そんなことも知らずに陽那はどんどん歩いていく。どこに行くかは陽那にしか分からない。どこに行きたいのか。そして凍弥に話したいこととは何なのだろうか？・・・

- 17時 某公園 -

凍弥と陽那は昨日と同じ公園、ベンチに座っていた

「何故・・・ここなんだ？」

凍弥は周りに視線を移す。すると、奇妙なモノがあった

(なんじゃありゃー！)

目の前のベンチの一部に黒い何かが張り付いていた。それを付け

たのは中田だと知らずに興味本意で凝視していた。よく考えたら、陽那の姿が見当たらない。何処に行ったのだろう・・・そんなこと言っていたら、向こうから誰かが歩いてきた

「おう・・・遅かったな」

「うん・・・凍弥くんが言った、『ICE キューカンバー』なかったから近くにあった自動販売機を全部探してきた・・・それでもなかったから代わりにコーヒー買ってきた」

「全部!??・・・それはお疲れさま。なんか、ごめんな・・・」

「良いって好きで探してきたんだからはい、これ」

陽那は右手に持っていた缶のコーヒーを差し出した

「おう・・・サンキュー」

凍弥はコーヒーを受け取り、早速開けて少量だけ飲んで缶を膝の上に置いた

「そういえば・・・陽那は何買ったんだ?」

「わたしは『みかん牛乳』だよ!」

陽那は左手に持っていた、オレンジ色のラベルのついたパックを凍弥の目の前に出した

「『みかん牛乳』!? そんなのあったっけ?」

「あったよ『リンゴ牛乳』がたくさん売れたから、それと同じようにして作られたのが『みかん牛乳』だよ」

「知らなかった・・・」

凍弥に説明した後、陽那はイツキに『みかん牛乳』を飲みほした

「プハアゝおいしかったー」

凍弥はそれを見てゆっくりとコーヒーを口に注いだ

「ところでさ・・・さっき大事な話があるって言ってたけど・・・」
「あゝそれぞれー！」

陽那は凍弥の左隣に座り、カバンを膝の上に乗せて中に手を入れた
何かを探しているようだ・・・

「あれゝ確かさっきここに入れたのにゝどこ行っただ？」

中々探しているものが見つからないようだ。その間、凍弥は目を
閉じ今日学校で見た夢のことを考えていた・・・

「あー！あつたゝ！！」

陽那が喜びの声を上げた。それと同時に凍弥は目を開け、頭を切り替えた

「何があつたんだ？陽那」

「これだよゝこれゝ」

陽那は右手を凍弥に差し出した

「こ、これは！」

凍弥は自分の目を疑った。陽那の右手には、夕日を浴びて金色に輝くリングがあった。龍紋も刻んであり、それは・・・紛れもなく・

・凍弥がシヴァルトから貰ったリングだった

「これ・・・どうした!？」

「これはね、夢で貰ったー」

「夢？」

（どういうことだ？俺と同じような夢を見たのか？）

「いつみた夢だ？」

「ん、つとねえー1限目から4限目の間かな、気づいたら昼休みだったー」

（オレと同じ時間帯に夢を見たのか？）

「どんな感じだった？寒かったか？」

凍弥は気がかりなことを訊いた

「え、つと・・・寒かったー」

（寒かった!？）

「なるほど・・・それで、続きを聴かせてくれ!」

「目の前に大きな影があつて、話しかけてきたのー」

「なんて？」

凍弥はズカズカと質問する

「確か・・・」

- 陽那の夢の中 -

【お前・・・凍弥と同じ臭いがするな。ここの者ではじゃないな・・・】

「どついう意味？ゝあなたは誰？」

【凍弥にこれを渡してくれ・・・これがなくて困っているはずだ・・・頼んだぞ！凍弥の友達よ・・・】

- 現在 -

「って言つて、どっかに行っちゃった・・・だからーはい！これゝ」

陽那は左手を凍弥の手の甲に置き、右手で凍弥の手の平にリングを乗せた。そして、そのまま握らせた。陽那は凍弥の手を覆うようにして、目を瞑り一言告げた

「大事な物なんでしょ・・・」

「ああ。ありがとう・・・陽那」

凍弥も目を瞑り感謝の言葉を口にした

「じゃあ・・・私は帰るねー」

「送っていくよ！」

「いいよゝ別にあんまり遠くないしゝ」

「いや！送っていくよー！」

「そおゝならお願いしまーす」

「おう！任せろ」

「じゃあ、帰ろうか」

「はい」

凍弥の腕にはリングがあり、とても嬉しそうだった。陽那もなんだか嬉しそうに見えた

凍弥は期待を胸に、公園を後にした

第16話 ICU（前書き）

自分なりに衝撃の内容です

第16話 ICU

陽那を家に送り自分の家へ帰る最中…凍弥は立ち止まり、月に向かって右手をのぼす。月明かりに照らされ、手首にしていたリングが光輝く。それを見て凍弥は嬉しそうな表情をして、また歩き始めたその日の夜空は澄んでいて、星々が多く見えていた。歩いてはいたものの凍弥は夜空を眺めながら歩いていた。そのせいで…

ゴッソッ！

「い、いでえー鼻うつだー」

前を見ていなかった凍弥は、電柱にぶつかってしまった。鼻を手で隠しながら道を歩いていく

そして…ある事件が起こった…いや、起こってしまった

「フッフフフ〜」

凍弥は鼻歌を歌いながら学校に向かって歩く。とても楽しそうに歩く凍弥。今日の隣には、陽那…ではなく中田がいた。中田は俯いたまま言葉を発することなく、凍弥の横を淡々と歩いていく。

同高校に通う生徒たちは歩きながら、凍弥を見て何か話しているようだ。前の凍弥だったら走って逃げただろう、しかし今の凍弥はそんなの気にすることなく悠々と歩いていく。右手には昨日、陽那から貰ったリングが陽の光を浴びて輝いていた。

数分後―凍弥は学校に着いた

そして…朝のHR、先生から凍弥にとって衝撃的な話を聞かされ

ることとなる

「えー皆さんに大事なお話があります…」

クラス担任の桐生先生（茶髪、女性、年齢：不詳）が教卓に手をつき、深刻な顔をして生徒を見渡す。皆は先生を見て、何を言うのか聞きたそうな想いを視線を使って表した。凍弥は先生の話なんて興味がなく、机に顔を伏せ目を瞑り、眠りに入ろうとしていた

次の瞬間―先生は衝撃的な事を口にした

「1 - A組の旭 陽那さんが意識不明の重体だそうです」

教室は沈黙に包まれ、クラスの皆は、「嘘だろ」と先生に訴えている様に見えた

「国立の病院、不知火に搬送され、手術が成功し、なんとか命を取り止めたそうです。詳細は…」

ドン！！

沈黙に包まれている最中、突如教室に音が響き渡った。皆は音の聞こえた方に目をやる。先生も突然の事で驚き、視線を一人に絞った。皆の視線の先には凍弥が立っていた。凍弥は俯いたまま、同クラスの中田をチラッと見た。すると中田は涙を流して泣いていた

ドンッ！！

「……………くそッ！！！！」

再び机を叩くと横に掛けていたカバンを手に取り、教室を後にし、そして…凍弥は国立不知火病院に向かって走った！

同時刻―国立病院・不知火―

ピッ…ピッ…ピッ…ピッ……………

ICUの中で心電図が波打っている…その隣にはベッドあり、陽那は眠っていた。見たところ、外傷はないようにみえる。ICUの部屋の前の廊下には長椅子が置いてあるが、誰も座っていない

その30分後、凍弥は病院に着いた…

ドンッ！ドンッ！

ICUと外のを隔てる窓を叩く凍弥。扉には面会謝絶と書いてある

「おい！！…おい！！陽那――！！」

ドンッ！ドンッ！

再び窓を叩く。そして、窓に頭を当てた

「何があつたんでんだよ…どうして陽那なんだよ！！」

凍弥の目からは一滴の涙が零れ落ちた

「あの一すみません」

「……………」

「すみません」

凍弥の左肩に手が優しく触れた。凍弥は左をスーと見た…そこには一人の女性看護師が片手に何かの紙か何かを持って立っていた。紙は束になっていて、少し厚みがあった

「あなたは…旭陽那さんの彼氏さんですか？」

「…いえ…友達…です」

「そうでさしたか、それは失礼しました」女性の看護師は、深々と一礼した

「あの…一つ。教えてもらってもいいですか…」

「はい。何でしょう」

「陽那に一体何があったんですか？」

「旭さんは昨日の夜に…」

「そんな…陽那の家に強盗！？そして、おばさんをかばって刺された！？」

「はい…全て事実です」

「じゃあ…おばさんとおじさんは今どこに！？」

「和恵さん、泰幸さんやすゆきは軽傷だったので、二階の病室にいますが24時間絶対安静だそうで、明日には退院できますよ」

「そう…ですか…ありがとうございます」

看護師は一礼すると歩いて、凍弥の前から立ち去った

因みに陽那のいるICUは三階。凍弥は廊下にある長椅子に座った看護師さんが話してくれた内容では、まだ犯人は捕まっていないらしく、今警察が懸命に搜索しているらしい。犯人の特徴としては、身長170cmぐらい、男ということしか分かっていない…凍弥は立ち上がり窓の前に立ち、窓に手をつき、陽那の方を見た

「俺が犯人捕まえてやる…」

そう一言告げると、ICUから姿を消した…

- 翌日 -

凍弥は陽那と同じICUの中で眠っていた…

- 昨日の夜 -

電灯の少ない車一台程度が通れる道。凍弥はその道の真ん中に立っていた…そこに、誰かが近づいてきた。電灯に照らされシルエツトだけ確認できた。シルエツトからして男だろう…凍弥は男の存在に気づいていたが、男は凍弥の存在に気づいていないようだ。凍弥はポケットから携帯を取り出し、どこかに連絡した。そして、再びポケットに携帯を入れた。どんどん男が凍弥の元へ近づいてくる。そして、凍弥は男が来るのを待ち構えた

男は凍弥の存在に気づいたが、知らないふりをして通り過ぎようとした。

「アンタ…一昨日の強盗犯だろ…」

「！！」

男は凍弥の言葉を耳にした途端、ポケットから手を出して凍弥に向かって振りかざした。凍弥はそれを軽々とかわし、そして暗闇に姿を隠した

「出てこいよ！…お前も殺してやるよ！ どうした？怖いのか？ハハ！」

男の右手で何かが輝いる。その手には果物ナイフを握っている

「……」

（そろそろかな…）

凍弥はポケットに入れていた携帯で時間を確認した。そして…男に向かつて突っ込んでいった

「オオ——！！！！！」

「ん！馬鹿なヤツだ！！」

「オオ——！！！！！」

「ん！馬鹿なヤツだ！！死ねえ——！！」

ドスッ！

凍弥の腹に果物ナイフが突き刺さっていた。

「グハッ！……」

凍弥は吐血し、血が地面に落ちた。刺された腹からも大量の血が道に流れ出す。凍弥の目には地面に落ちた血がより赤く光るのが見えた

「よし…計算…通り……」

「！！！」

男の目には赤い光が近づいてくるのが見えた。男は直ぐにナイフを凍弥の体から抜き、逃げようとナイフを引こうと腕を引いた

その時、凍弥の両手が男のナイフを握っている手を掴んだ

「くそっ！何なんだよー！！離せよ！！！」

男は腕に力を込めて、引き離そうとする。でも、凍弥の力の方が強く引き離すことができない。男は引くのを止め、再び凍弥に向かって力を込めた

ドスッ…ドスッ…ドス

「グハッ！ グハッ！…グハッ！……」

凍弥の腹にナイフが刺さる度、傷口からは大量の血が流れる

「もう…ダメ………だ」

凍弥は体に力が入らなくなり、地面に倒れた…男は直ぐその場から逃げようとした。しかし、袋の鼠。四方を警官に囲まれていて既に袋の鼠だ

「捕らえる——！！あと…至急、救急車を………」

「陽那…やったぞ……お前を刺した…犯人は…オレが……捕まえた………ぞ」

凍弥はその場で意識を失った

5時間の手術をして、何とか命をとりとめることはできた。しかし、意識を取り戻すのは本人の力が必要らしい

凍弥の両親は昨日の凍弥と同じように、窓を叩き泣きながら、凍弥の名前を叫んでいた

父さんは母さんの肩に手をやり、母さんを慰めていた

「大丈夫だ…母さん…凍弥は必ず帰ってくるさ！だからね…私たち

は、じつと待とう……凍弥が帰ってくるのを」

父さんの目には涙が溜まっていたが、流すことはなく、じつと耐えていた

そして、二人は長椅子に腰掛けた

第16話

ICU（後書き）

第17話 おかえり（前書き）

すいません・・・試験などで書きあがるのが遅くなりました

読者の方々ごめんなさい

ではどうぞ

次も遅くなると思います。でもできるだけ早く書き上げたいと思います

読者のみなさんこれからよろしくお願いします

第17話 おかえり

「凍弥くん…凍弥くん!……」

(あれ…陽那の声が聴こえる……あ…そうか…確かオレ…刺されて…)

「此処は…そうか…オレ…死んだのか…って、ん?…陽那は死んでないよな…」

凍弥は陽那のことを思い出し、全身の毛が逆立った。体は暗闇の中に浮いていた。ずっ…と先には小さな光が輝いている。凍弥の下には赤く輝く怪しい光があった。凍弥はそ光と光の中間にいた。目の前に見える光しか見ていなかったが、横目で見た景色が序次に、黒から赤に変わっているのに気付いた

「あれ?…まさか?………」

凍弥は直ぐ様、下を見ようと体を反転させた。

「落ちてる——!!」

見た途端、凍弥は直ぐに体制を元に戻し、懸命に平泳ぎをしはじめた…でも、どんなにかいても進まない。むしろ…体力の無駄

「ゼツテ——やだ——!!」

何が嫌かと言うと…下の地獄らしきところに行くのがだろう…たぶん。しかし…進まないんだなあ…これが。凍弥は大量の汗をかき、どんどんスピードが落ちていく。さあ…凍弥はどちらに行ける

のでしょうか？天国か？それとも地獄か？ハハハ。疲れたのか、手と足の動きが止まった。

「はあーはあっ…はあ…もう無理！」

凍弥は力を使い果たしたみたいで、動きを止めた。徐々に下に向かって落ちていく…

「はあ…何で地獄なんだあーオレ何かしたっけ？…」

凍弥は今までのことを頭の中に、巡らせる。しかし、凍弥の記憶には何か悪いことをした、という記憶は無く首を横に傾げた

「結局…陽那に言えなかったなあ…それだけが心残りだな…うつし、諦めーた！」

妥協！？もう諦める？ちよつとは貪欲に行けよ…まあ…いつか…つて良くねエーよ！主人公死んじやうじゃん！！

凍弥は体の力を抜いて、流れ？に身を任せた

「ダメだよ！諦めちゃ…凍弥くん…」

「陽那！？…どこにいるだ？…」

「ここだよ」

凍弥は陽那の声が聴こえた方に視線を移した。でも、視線の先には闇と一点の光しか目視できない

「ど…だよ…居ないじゃないか…」

凍弥は力を抜いた。目からは涙が零れていた…どんどん落ちてい

く体、それと共に瞼も落ちていく。そして、目を閉じた…

「…凍弥くん……………凍弥くん…」

(あれ?…陽那の声がする……………)

凍弥は目を開けた。そこには、凍弥の名前を必死に呼ぶ陽那がいた。凍弥は目を瞑った

(陽那?……………何で?…そうか…ここは天国なのか?…よかった…オレは天国に来れたのか)

凍弥は再び目を開け、目の前の景色に驚いた

「!!!!!!」

凍弥が一人回想している間に、目の前の景色が一変した。そして、凍弥は上半身を起こした。

「おい!…トウヤ!!!!」

桜色の髪の少年が凍弥の肩を握る。それは正真正銘ナツだった。その手は力が入っていて、でも肩は痛くはなかった。他にもハツピ―、グレイ、ルーシイ、エルザ、ギルドのメンバーが凍弥の寝ているベット囲んでいた

(ナツ!!!!?それにみんな?…どういうことだ!?!…ここは天国じゃないのか?)

ナツは肩から手を放し、一歩後退り

「すまない！…オレが無理やり山に連れて行つたせいで……」

ナツは一言告げると深々と頭を下げたまま、ずっと下を向いている。凍弥は「いいですよ！！全然」と笑顔で言おうとした、でも口が相変わらず塞がっていて、言うことができなかった。それに…ナツの足下にある物を見て、少し時間を置いた。そして…ナツの肩にポンっと手を乗せた。ナツはその時やっと顔を上げ、凍弥と目を合わせた。凍弥は笑顔でナツと目を合わせた。

「許してくれんのか？…」

凍弥は首を縦に振った

それを見てナツは目から涙が零れ出した。ナツは涙を直ぐに拭いさった

「おっしや——！！トウヤ！仕事行こうぜ！！」

ナツは凍弥の腕を掴みベットから連れて行こうとした。それを見たエルザがナツの前に立ちふさがり…

「まだトウヤは完治していないんだ！一人で行ってこい！！」

殴った。ナツは病室の窓から見事外に飛んでいった

「ふう…ゆっくり休め。そしてギルドに戻ってこい」

エルザは一言告げると病室を後にした。

「お！来てたのか？お前も行ってくればどうだ？」

エルザは病室のドアのすぐ近くにいた少女に声をかけた

「でも…私は…今日は」

「お前の…気が向いたときでいいから…」

「はい！…それでは」

少女はエルザに一礼するとその場から立ち去ってしまった
病室内では…みんな凍弥に歩み寄り

「「「おかえりー！！」「」」

「た、ただいまー！」

凍弥は少し恥ずかしそうに返した
みんなは凍弥の復活？回復？を喜んだ…

――1週間後――

「いやー懐かしいなーギルド！…なんかまたギルドの雰囲気変わったような気がするんですけど…なんかありました？ミラさん」

凍弥はカウンターの前のイスに座り、奥にいるミラに声をかけた

「そうねえ。新しくギルドの仲間が入ったからじゃないかな…」

ミラは笑顔で凍弥の質問に答えた

「新しい仲間？」

（誰だ？新しい仲間って？）

凍弥は「どんな人なんだろう」と一人考えていた…

「噂をすれば」

ミラはギルドの入り口の方に視線を送った。凍弥もミラと同じほうを見た

「え!？」

凍弥は入り口のところに立っている人を見たと同時に固まってしまった

「こっちこっち」

「あ。ミラさん」

その新人はミラに手を振り、走ってミラ、凍弥の元に走ってきた。凍弥は相変わらず固まっている。近づいてくるとともに、どんどん明確になるその新人の正体

「ミラさん。おはようございます」

新人はミラに一礼すると、凍弥の存在に気づき視線を移した

「あれ？凍弥君!？今日から復帰なんだ〜!」

「陽那…なんでお前が?…ギルドに?」

そう!新人の正体は陽那

「マスターが誘ってくれたの『うちのギルドにはいつてはみんなか?』って」

陽那はマスターのもののまねをしてみせた

「ヒナ。上手いわね…フフ」

ミラはそれを見て笑った。何気にツボだったのかもしれない

「マスターが？」

（オレが気を失っている間に何があったんだ？…あれ？…）

「なんで陽那がここにいるんだ——！！！！！」

「へ？」

「そういえば…病室にも居たような…オレが目を覚ましたとき手を握ってくれてたような…あれはオレの見間違いじゃなかったのか！？」

「そうだよ居たよ」

ぺちっ

凍弥は陽那を見て、視線があっただと思ったら手を陽那の頬に手を当てた

「ちょ…何するの」

凍弥は陽那の頬を抓った

「痛い。痛いよ…凍弥君…」

「すまん…陽那…ちよっと！」

「ちよっ…どうしたの？」

「いいから、ちよっと話があるんだ」

凍弥は陽那の手を掴みギルドの入り口に向かって歩き出した

第17話 おかえり（後書き）

間違いの指摘や感想ある方はお願いします
評価してもらえると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2187t/>

凍りの滅竜魔導士

2011年12月2日18時54分発行